

構想の計画から読み解く転換期の都市東京

堀, 雅宏 / HORI, Masahiro

(発行年 / Year)

2012-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2012-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P377.5

M35-2

2011-7

2011 年度 修士論文

構想の計画から読み解く 転換期の都市東京

指導教授 高村雅彦教授

副査 富永讓教授

副査 陣内秀信教授

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻

高村雅彦研究室

09R5342

堀 雅宏



「City Tokyo of turning period view from the plans which compose of the ideas」

Study purpose

What is a city? In order to answer this question, this essay focuses on Tokyo in from the late Meiji era to the early Showa era and explains Tokyo at that time by analyzing people' s view toward Tokyo and should be their ideal Tokyo from the plans which were not carried out.

Study means

[Tokyo of turning period]

From the late Meiji era to the early Showa era, various forms of social problems come up from the modernization which had begun in the Meiji era greatly influenced on the society. Consequently, people began to be concerned the city, for example, civic problems and the change in the style of architecture, the recovery of the city which had been devastated by the Great Kanto Earthquake. Therefore, It can be said that. It was in “the age of city” . Therefore, by focusing on this turning period, the origin of city of Tokyo can be seen.

[The plans which compose of idea which were not carried out]

Why we heeded to deal with the plans which were not carried out. This is because the social background and people' s philosophies and ideas of Tokyo, can be viewed in only these plans. Therefore, this essay reaches “City Tokyo” by the plans which were not carried out in Tokyo of turning period. In addition, I take the following four plans.

1. Water parks plans (Venice of Tokyo)-Nakamura Mamoru[1912]

He planned water parks which connected a longing for Venice to canal of Edo and has assembled the canal around the five bridges.

2. The theory of Tokyo new city -Tanaka Chigaku[1920]

He planned ideal city on the water as solving method which regretted Tokyo at that time from complaint of land transportation

3. Municipally bathhouse and the place entertainment were built at slum.

-Yoshii Shuntaro[1925]

He planned municipally bathhouse which based on bathhouse of Edo era for civic problems labor and slum.

4. Adaptation plans of Asakusa -Kawakita Rentaro[1928]

He planned Asakusa which the place of the popular entertainment changed to place of modernism.

The way they planned and composed the places by uses, functions and images for each the plans which compose of the ideas. Then, this essay reads “means” and “aims” by analyzing the social background and people' s philosophies the focus place and views Tokyo at that time. Therefore, this essay explains what about “City Tokyo” of the turning period. Through, they read “City Tokyo” and should be form from the “means” and “aims” by showing the view of city.

序章

- 1) はじめに
- 2) 目的と方法 [転換期の東京/実現しなかった構想計画案の意味/4つの計画案の意味]

1章 江戸の復権と共存

- 1) 中村鎮 ヴェニスへの憧れ
- 2) 東京のヴェニス ー水上公園計画
- 3) ヴェニスと堀割 [幻想のヴェニス/内向期]
- 4) 伝統と近代の融合 [水都江戸と東京の近代化/妻木頼黄の日本橋/浅草式公園]
- 5) 結び ～江戸の復権と共存

2章 新都市のアイデア

- 1) 田中智学 都市への夢
- 2) 東京新都市論
- 3) 田園都市思想 [ハウードの田園都市論/郊外住宅地としての田園都市/新都市への影響]
- 4) 国際商業都市東京への夢 [埋立地とユートピア/商都東京]
- 5) 結び ～新都市のアイデア～

3章 健全な社会へ

- 1) 吉井俊太郎 労働者への娯楽
- 2) 貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場
- 3) 民衆娯楽場 [風呂屋二階/床屋]
- 4) 都市下層民の善良化 [集住の解体と地帯として地域化/下谷を例に/教化としての娯楽]
- 5) 結び ～健全な社会へ～

4章 モダニズムの可能性

- 1) 川喜田煉七郎 建築界の異端児
- 2) 浅草改造案
- 3) 建築のモダニズム [3つの建築計画案/建築科学至上主義]
- 4) 都市のモダニズム [浅草から銀座へ/都市への体現]
- 5) 結び ～モダニズムの可能性～

終章

- 1) 結論 [都市の民主化/構想の計画の可能性]
- 2) おわりに
- 3) 参考文献/図版出典

序章

1. はじめに

『都市』とは何であろうか。

①みやこ。都会。都邑

② (city) 一定地域の政治・経済・文化の中核をなす人口の集中地域。古代ギリシア・ローマでは国家の形態をもち、中世ヨーロッパではギルド的産業を基礎として時に自由都市となり、近代資本主義社会の勃興と共に発達して社会生活の中核となる。

「学園都市」「城郭都市」 ⇄ 村落 ⇄ 農村

『広辞苑』

辞書で引くところのように記述されている。様々な呼び名で都市は存在し、時に農村との対比で用いられてきた。しかし、果たしてそれだけでだろうか。

『都市』は複雑である。様々な人、職業、ライフスタイル、文化などが複雑に絡まりあい、一つの空間に共存することで、形成されている。見る視点を変えれば、幾通りもの表情を見せる。また、古来より桃源郷やユートピアといった理想郷も描かれ、未来の対象としても『都市』は捉えられてきたのである。

『都市』とは非常に複雑で魅惑的な対象である。

近年、都市再生という言葉がブームになりつつある。ヨーロッパのように古いものを保存する方法からアジアのように開発と保存の両立を図る方法と様々である。日本も成長社会から成熟社会への転換期の中で、再生への模索が行われている。『都市』の再生とは何なのか。『都市』とはどうあるべきか。そのことを考えると、『都市』とは何かという疑問をより一層強くさせる。

同様のことが『東京』でも言えるように思う。

そこで『東京』を研究対象にすることで、『都市』とは何であろうかという疑問に迫りたい。その際、2つの言葉が私の研究を方向づけた。

温故知新：昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること。 『広辞苑』

「私には東京がどうあるべきかを性急に考えるよりは、“東京”とは何であったかを内側から自覚するほうがはるかに重要であろうと思われるのである。」 『思想としての東京』（磯田光一著）

つまり、歴史を探り、学ぶことが、物事の本質を捉える重要な作業であり、今後の方向性を考えていくうえでの手がかりとなる。そして、そこに歴史研究の意義がある。

そこで、歴史的な視点から『都市東京』を探ることで、その本質に迫り、『東京』とは『都市』とは何であるのかを考えていきたい。

2. 目的と方法

歴史的な視点から『都市東京』を考えるうえで、本論文では時代を明治後期から昭和初期に焦点を絞り、その時代の実現しなかった構想の計画案から、『都市東京』をどのようにとらえ、またどうあるべきと考えていたのか、その都市観を読み解き、当時の『都市東京』とは何であったのかを明らかにすることに目的をおく。そうすることで、『東京』とは『都市』とはその本質の一側面に迫る。

転換期の東京

明治後期から昭和初期という時期は、日本の転換期であり、都市の時代であったと言える。

200 年以上続いた江戸幕府が終わり、明治という新しい時代が始まる中で、「文明開化」「殖産興業」「富国強兵」「脱亜入欧」の号令のもと西洋の文化や技術を積極的に取り入れ、近代化を図った。西洋諸国に追いつくため、わき目も振らず西洋化に走った時代であった。

しかし明治も後期になると、そのひずみは徐々に現れ、大正に入るとますます拍車をかける。日比谷焼打事件や米騒動といった民衆騒擾や大正デモクラシーと称される社会運動、第一次大戦での好景気による貧富の差や労働問題などの社会問題も深刻化し、サラリーマンといった新中間層も現れる。民衆が力を持ち、様々な運動とともに時代が大きく動いた。

そんな中、東京は都市化を迎える。

東京には各地から人が集まり、カフェやデパート、遊園地や活動写真など西洋を起源とする都市文化が花開く。しかし一方で人口の集中は、過密による住宅難やスラム、衛生問題等、都市問題の深刻化を招いた。大正 8 年制定の都市計画法と市街地建築物法が物語るように、東京は都市化し、都市の時代が訪れたのである。

建築界にも変動が起こる。

西洋技術の習得が急務であった時代が終わり、西洋一辺倒であった建築に疑問を持ち始め、分離派建築会が代表するように、建築の本質や可能性を問う動きが起こる。それは都市にも広がり、都市への意識の高まりを見せる。この頃から、各建築雑誌に都市という言葉が多く見られるようになることからうかがえる。そして、大正 12 年に起こった関東大震災は甚大な被害とは裏腹に都市改造のチャンスをもたらし、都市への意識をますます高くした。

しかし、昭和に入り、戦争へ本格的に参入すると、それどころではなくなる。再び火がつくのは戦後の復興からであった。

以上のように、明治後期から昭和初期という時期は、明治から始まる近代化のひずみが様々な形で現れ、社会が目まぐるしく動いた、日本の転換期であった。そして同時に、都市問題の深刻化や建築界の変化、関東大震災の都市改造のチャンスなど都市というものが意識された、まさに都市の時代であったと言える。

つまり転換期であるこの時期に焦点を当てることは、『都市東京』の原点をとらえることができるのである。

実現しなかった構想計画案の意味

何故実現しなかった計画案を扱うのか。そこには実現した計画では捉えきれない、当時の社会背景や都市東京への理念や理想を読み取ることができるからである。

『あったかもしれない日本 幻の都市建築史』で橋爪紳也氏は、「…成就しなかった案も含めて、時代の必然であったと見るべきではないか。できなかった建築物や未完のままに放棄された都市をめぐる叙述は、できあがった建築物や完成した都市を列記することから生まれる史観を補完する。より積極的にいえば、双方は表裏の関係にあって、一体であるはずである。」と事実をもとに描かれる歴史を補完するという価値を、構想の計画案がもっていると述べている。

また、『未完の東京計画 実現しなかった計画の計画史』にて石田頼房氏は、実現しなかった計画を扱うことについて、「…なぜ実現しなかったかということに関してさまざまな背景と理由がある。…」と当時の政治的・社会的状況が原因の場合や実現よりも理念を示すねらいで提示した場合などと実現しなかった理由を挙げるとともに、「…その理由と背景を探ることによって、当時の都市計画家たちの考えや、それを取りまく社会・政治の状況が、ある意味では、よりよく見えてくる場合が少なくない。」と述べ、「…実現しなかった計画、未完の計画を真剣に検討することで、日本近代都市計画史の本当の姿、少なくともその最も重要な一面に触れることができるのではなからうか。…」と、実現しなかった構想の計画案をより深く見ていくことで、時として実現したものよりも当時の社会背景や計画者の理念を読み取ることができる」と述べている。

つまり、実現しなかった構想の計画案には、実現したものと同等の、もしくはそれ以上の価値と可能性を秘めており、それらを読み解くことで、『都市東京』の本質に迫ることができるのである。

このことをふまえ、以下の4つの構想計画案を扱う。

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1、水上公園計画（東京のヴェニス） | — 中村鎮 [大正元年 1912年] |
| 2、東京新都市論 | — 田中智学 [大正9年 1920年] |
| 3、貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場 | — 吉井俊太郎 [大正14年 1925年] |
| 4、浅草改造案 | — 川喜田煉七郎 [昭和3年 1928年] |

各々の構想計画案に対して、用途や機能、イメージなど、どのような空間を構想して計画しているのか。また時間軸で場所の性格をとらえ、当時の状況を見ていくことで、なぜその場所に計画したのかなど、空間や場所性を軸に計画者の思想や当時の社会背景を交えながら分析することで、構想の計画案がもつ「意味」や「意図」を読み解いていく。

そして、その「意味」や「意図」から、計画者が『都市東京』をどのようにとらえ、またどうあるべきと考えていたのか、その都市観を明らかにすることで、転換期の『都市東京』とは何であったのかを描いていく。

4つの計画案の意味

ここで、4つの計画案が意味するものを考えたい。

明治の都市計画とは、国家とのつながりが深いものであった。建築家という職業が言ってみれば、国のための職業であったことから分かる通り、建築や都市を計画又はデザインすることは国家をつくることと等しかった。また、個人への依存度も非常に強いものであった。ひとつの事件や、ひとりの死去で計画が頓挫する事はしばしば起こり得た。官庁集中計画や妻木・辰野の議院建築問題からも分かる。そうした中では、構想の計画を描くという行為はある意味で特権であり、実現との距離は近いものであった。『明治の東

京計画』で、藤森照信は石田頼房の言葉を借りて、「…明治の都市計画はプロジェクト型で、一つの具体的な都市像を掲げ、それをある期限内に実現するために法と人と財源が準備される…」と述べていることからもうかがえる。

しかし、世は大正デモクラシー、民衆の時代である。建築も民間企業の建築が建てられるようになるなど、民衆が力を持ち始めた。そんな中で、構想の計画を描く行為は民衆の手に下り、市民権を得たのである。大正9年に出された『日本及び日本人』の「百年後の日本」では、100年後の未来が、民衆によって空想されている。

つまり、明治の計画が“官”からの視点で構想されたものであるなら、この転換期の計画は“民”からの視点で構想されたものととらえることが出来る。そして、それは同時に、実現との距離の広がりをも意味し、夢物語で終わってしまうものでもあった。しかし一方で、国家というしがらみから解放された構想は、当時の政治的、経済的背景からは切り離された、純粋な理念や理想を見ることが出来る。

このような背景をふまえ、これら4つの構想計画案は、民からの視点に加え、東京全体の計画ではなく、大きいもので一区、小さいものでは都市建築の規模を扱い、そして敷地を特定している。これは、言い換えるならば、都市東京というものを自身の枠組みの中でとらえ、そのうえで構想していることを意味する。そこには、自身の思想や経験が色濃く反映され、また、敷地に対する意図から、当時の都市東京をどのようにとらえていたのかが見て取れる。

つまり、これら4つの構想計画案を見る事で、「都市東京」を、民衆の視点で、より深い地点から読み解くことが出来るのである。

1 章 江戸の復権と共存

1. 中村鎮 ヴェニスへの憧れ

1912年7月、明治天皇の崩御とともに躍進の明治が終わり、時代は大正に入る。この年、一学生であった中村鎮は建築雑誌に“東京のヴェニス”という構想の計画案を寄せる。



図1-1 中村鎮

中村鎮は明治23年(1890)福岡県糸島郡に次男として生まれ、中学卒業後に、台湾督府土木局のもと台北で、建築設計及現場監督助手を務めていた。明治43年に早稲田大学に入学し、佐藤功一のもと建築を学び、今和次郎とは共にエジプト展をやった仲である。大学を卒業後は、陸軍省や東洋コンクリート工業、日本セメント工業で技師として働き、また中央工学校高等科や早稲田大学附属早稲田高等工学校で歴史学の講師も勤めた。大正10年に中村建築研究所を設立し、鉄筋コンクリートの建築や研究に邁進し、新興建築家連盟の設立に尽力するも、昭和8年(1933)にこの世を去る。

短い生涯のなかで、建築家としての作品よりも、中村式ブロックの発明・実践や雑誌への数々の評論で名が知られていた。そんな中村は、大正元年10月、当時学生でありながら、後に編集にも関与する小雑誌『建築ト装飾』にて“東京のヴェニス”というタイトルで水上公園計画案を載せることとなる。その背景には、中村が東京のヴェニスを載せる前月に出された、美術新報のヴェニス号や、その書評として時事新聞に寄せられた水の都ヴェニスによる影響があり、これらに刺激を受け、「自分がヴェニスを憧れに居たのは今に初まつた事ではなかつた。…一方には早くから東京の堀割に趣を感じて、何時となく両者を結び付けて考へて見た、……茲に彌々水中の樓閣を築く的の空想をやつて見る事とする。」とかねてから温めていた想いを世に出したのである。

2. 東京のヴェニス -水上公園計画-

ヴェニスへの憧れと堀割の趣を結びつけて生まれた水上公園計画。果たしてそれはどんな計画であったのか。残念ながら詳細な図面やスケッチはないものの、雑誌によせた文章からは中村の構想した空間がひしひしと伝わり、その世界観に吸い込まれてしまう。では、中村の言葉を借りながら詳細に見ていこう。

場所

中村が構想した計画地は、江戸橋、荒布橋、思案橋、鎧橋、兜橋に囲まれた運河の集合点である。ここを選んだ理由を中村は二つあげている。

一つ目は、「假に道を兩國から南に取つたとする。美しい夢の様な人形町を駆けぬけて來た電車は、鎧橋と云う名も形も武骨な鐵橋を通るであらう。其時眼を右



図1-2 中村の構想スケッチ(水上公園計画)

の窓になげた人は、ぱつと輝く廣い氣持のよい水面を見るであらう。…私が東京のヴェニスともて選んだ心は即ち此處である。」とあるように、鎧橋を渡るときに突如眼前に広がる水面に、心を奪われ、ヴェニスを想起させられたのである。また、「…もし急ぎの用事がなかつたら電車を降りて歩き給へ。」と散歩を促し、周囲の風景を丁寧に描いている。一部を取り上げよう。「…古い大きな洋館が空を限った細い横町を行くと兜橋に来る。橋の上に立つて右を向くと古い色のあせた、煙突が高く屋根の上に出た建物を見るであらう。之が所謂ヴェネチヤゴシック式の建物である（澁澤事務所）左を見ると石のアーチの架った古い趣のある橋を見るであらう。之が亦ヴェニスによくある橋である。…」このように、水、橋、洋館が織りなす風景が中村にますますヴェニスを結びつけたのである。

そして中村がこの場所にヴェニスを見出した風景がもう一つある。それが二つ目の理由である。この眼前に広がる水面は各地からの運河の結節点であり、江戸橋から日本橋へ向かえば外濠に続き、荒布橋と思案橋を抜ければ堀留りへ、兜橋を抜けると、白魚橋にぶつかり、京橋がかかる運河へと続き、鎧橋を抜ければ大川へと出る。このような運河の結節点において数々の舟の往来が中村の目によりヴェニスを印象づけたのである。

公園

こうして、ヴェニスと結びついた運河の結節点に公園を計画するのだが、その背景には「…下町の中心では思ふ存分な公園を造るなど思ひもよらぬ事であらう。然し一方からこんな處に駆け廻つて居る人の爲にこそ眞に公園の必要があるのである。」と公園の必要性を感じ、「此等の處に集まる人達は終日忙しく使つた頭を安めるため夜に於てどんな娯樂を取つて居るかを見ると、遺憾ながら此等の人を慰める可き設備は今の處何もない。」と周辺で働く人々の環境を憂い、その人達のために「…上野や芝の暗い森の中をおぼつかない瓦斯の光に歩いて見たつて一向有難くない。どうしても浅草式の處がこの繁華の中心地に欲しい。」と浅草のような賑わい溢れる民衆娯樂場を構想したのである。また、「…下町の人々の娯樂場であると共に山の手の寂しい人達もこの美しい灯に酔いに來る事が出来る。更に田舎から來た客も如何にも都會らしい情緒を味ふ事が出来る。」と都会に集う人々誰もが訪れる名所にしようとしていた。

参考材料

また、中村は雑誌の中で空間のイメージについても述べている。「大體の標準は勿論ヴェニスに取る事とするが他に二三の氣持よい處を擧げて参考としやう。」という書き出しから、台南、淡水の港、河に臨む港、嚴島そして江戸の面影の5つを取り上げて記述している。

まず台南においては、「…足一度南清や臺灣の地を踏んだ時私等の心を刺激して溢るゝ嬉しさを誘ふものは其強烈な色彩であらう。」と自身の台湾時代を思い出し、その色彩溢れる空間を参考にしている。

淡水の港では、厦門や上海、長崎などを例に挙げ、国際貿易港ならではの文化の混合が見せる特殊な情緒を。

河に臨む港では、大利根の下流や揚子江の流域を挙げ、「所謂水國の秋にはしんみりとした趣がある。」とその情緒あふれる風景を構想している。

4つめの嚴島では、「自然が其の軟かさの眼を畫した内海の空氣は正にあの波の眠つたアドリアチツクの面影を偲ばしめる。」と言い、また「優雅の極みを畫した平安末期の情趣をバックとして立つて居る」と自然と歴史が織りなす空間の質をあげている。

そして、最後に江戸の面影では、「爛熟した元祿の文明を先にして、永い廢頹的の空氣に包まれて來た古い

江戸には、一種獨特の趣味が深く根ざして居る。其の趣味には爛熟の域を通り越した一種の澁味を持つて居る。其が江戸趣味の中心となつて居るものである。…」と江戸が築き成熟させた文化に趣を感じ、「…勿論東京に作るベエニスであるからには、之の御本場の江戸趣味は最も多く取入れたいと思ふ。」とヴェニスと江戸の共存を図っている。

一般の設備

そして、建物や舟の話に入る。

「勿論水上公園であるからには總ての家は水に向つて正面を置いて舟から直ちに玄関に入り得る様にしなければならぬ。」と 50 から 60 軒の住宅を想定しており、すべて水上からアプローチできるようにしている。他にも、歓楽の設備として寄席芝居、カフェー、展覧会場、レストラン、活動写真館などを設け、「…都合よく並び建てる様にしたい。」と娯楽地帯を構想している。また、「…何處か一ヶ處適當に撰んで家の二三軒分に相當する廣場がほしい。其處には奏樂堂なども置いて舟の中からでもレストランのベランダからでも見たり聞いたりされる様にして置きたい。」と広場を設けること、そしてやはり舟からの景観を大切にしている。

次に舟の話へと続く。「扨て水上公園であるからには小舟の設備に重きを置かねばなるまい。」と始まり、各橋に停留所を設け、舟はヴェニスになぞらえゴンドラをイメージするも、「あんなに細長くては一部に限られた公園に於ては至極不便である。」と短い3人乗りのボート風のものと 10 人程の乗合のものを構想している。舟のデザインについては、ヴェニスにあるような黒ではなく、「…参考にした淡水港の小舟を適用したい。赤や青や緑の色で少し強過ぎる位に塗つても差支なからう。」と色彩豊かなデザインを考えている。また舟は2種類あり、自分で漕ぐものと舟人に漕いでもらうものがあり、棹さすものと漕ぐものとに分け、「公園の中や其近くの堀割を行くのはなるだけ棹でやりたい。」と述べる。

それから「…舟の事はこの位にして建物の方に移らう。」と建物の話へと続くのであるが、残念ながら史料はここで途切れる。これ以降掲載されていたのか定かではないが、舟について詳細に記述していたことから、建物についても、詳細な記述があったと推測される。しかし、今まで見てきたように、詳細な図面やスケッチはないものの、空間のイメージはかなり語られており、そこには、まさに東京のヴェニスが描かれていた。

さて、このような夢想とも言える水上公園計画が何を意味するのか。次節より見ていきたい。

3. ヴェニスと堀割

ヴェニスと堀割を結び付け生まれた水上公園計画。しかし、そもそも何故ヴェニスと堀割が結びついたのであろうか。それを解き明かすにあたり、まずは中村鎮にとってヴェニスとはどのようなものであったのかから、とらえることにしよう。

幻想のヴェニス

ヴェニスとは、英語表記の呼び名であり、イタリア語ではヴェネチアと呼ばれる。(以下、歴史の説明の際だけにヴェネチアという表記をする。)

ヴェネチアは、かつてヴェネチア共和国として 11 世紀から 15 世紀に東方貿易において東西の中継地として繁栄した独立国家であった。東方との貿易が独自の文化を発展させ、また独特の地形とも相なって、ヴェネチアを水の都として世界有数の文化国家として知らしめたのである。

15 世紀末、ポルトガルの新航路発見により衰退の危機にさらされたヴェネチアであったが、強国であったために、政治・宗教的に独立した立場をとっていたこと、また水運主流のためにとっても静かな街であったことが美術家・思想家などの文化人に愛され、文化・芸術の拠点として文化色をより強くしていった。

しかしそんなヴェネチア共和国も時の皇帝ナポレオンに侵略され 1797 年に崩壊した。その後はフランス・オーストリアによる支配によって、陸の視点からの都市整備（鉄道、橋、歩道など）が行われ、水の都ヴェネチアにも近代化の波が押し寄せた。また同時にヴェネチアはイタリアの一地方都市に成り下がり、ヴェネチアの衰退にますます拍車をかけた。

社会的に沈みゆくなか、観光業だけは順調であった。これは、後の世界遺産登録からもわかるように、ヴェネスの旧市街は、面として中世の姿が保たれていたことで、近代に対して、ノスタルジアの対象としてヴェネスがとらえられ、観光地として人気があったのである。ちょうど日本でいう京都や鎌倉に対する気持ちと同じである。そして、それは、クリスチャン・ベックが「ヴェネツィア史の専門家たちがたいいてい、ヴェネツィア共和国の滅亡のところで彼らの著作を打ち切ってしまうのは、無理もない。」と述べるように、ヴェネスを対象にした数々の書物が、ヴェネチア共和国の滅亡までで終わっていることからもうかがえる。



図 1-3 15 世紀のヴェネチア（F・ガアルディの水彩画）

では、日本にはどのように伝わってきたのであろうか。歴史を見ればわかるように、ヴェネスは東方文化との橋渡しの役割を演じており、その影響はヨーロッパ各地に及んでいた。そのため西洋史においても確固たる地位を築いていたのである。そうしたなかで、文明開化とともに、西洋文化を学ぶ日本人にとって、ヴェネスは避けては通れないものであったことは、想像に難くない。具体的には、絵画などの芸術品や特に書物によるところが大きく、森鷗外に訳されたアンデルセンの『即興詩人』やゲーテの『イタリア紀行』、またはラスキンの『ヴェネスの石』の影響も大きいであろう。

しかし、ここで忘れてはならないことは、前にも述べたように、近代にとってヴェネスとはノスタルジアの対象であり、彼らもその一人であったことである。そうした想いで書かれた書物を読んだ日本人は、ヴェネスに対してどのようなイメージを持つであろうか。当然、同様にヴェネスに対して、かつての繁栄と文化による輝かしい水の都ヴェネスを想像し、憧れを抱いたことであろう。こうした想いは、中村鎮が東京のヴェネスを書くきっかけとなった美術新報のヴェネス号からもはっきりと読み取れる。

「ヴェネスと云ふ處を繪で見、又人の書いた文章で見た時の心持は、多くの夏の心持或は秋の心持であつて、空が晴れて、空氣が透明で、光線が明るく、風の肌に觸るは心持が何とも言へない、特に夜ゴンドラに乗つて水に浮べば人間の境遇と云ふものよりも寧ろ或は詩中の人物が、書中の人物になって了う様な心持である。之が私の想像のヴェネスであつた。」（黒田清輝）

「ターナーの線を見たり、ラスキンのヴェニス賛辭を聴いたり、着色寫眞を見たり、活動寫眞で見たり、ヴェニスを見て來た人の話を聴いたりすると、ヴェニスと云ふ市街は、世界で一番美しい市街の様に思はずには居られなくなる人が多いかも知れぬ。」(齊藤興里)

「…ヴェニスを非常なものにした媒介は、これと云ふて纏つた一冊の書物でも、事件でも無く、あちらこちらで、新聞雑誌、小説、論文の中に読み集めた、ヴェニスに關する他人の感情智識が自然と自身に感染して、未だ觀ぬヴェニスに、一種自分のヴェニスを製出したのであつた。」(岩村透)

岩村透の記述が、日本への伝わり方を的確に物語っており、数々のヴェニス賛美からヴェニスのイメージが独り歩きしていることがうかがえる。こうして、幻想のヴェニスが日本人に、そして中村の心に形成されたのである。「自分がヴェニスを憧れに居たのは今に初まつた事ではなかつた。それが學校の講義やら建築などでいよいよ培はれて來たのであつた。」と述べていることからもうかがえる。

しかし、「…美術新報の特別號としてヴェニスに對する諸美術家の御話が出た。待ち兼ねて見たがあまり自分の期待が大き過ぎたためか聊か失望した。」とあるように、美術新報のヴェニス特集は満足のいくものではなかつたようである。それは実際に訪れた人々の感想のなかに、言ってよかったという人もいれば、想像と違い幻滅したという人もおり、評価は半々であつたからである。ヴェニスに幻想を抱いていた中村にとっては聞きたくない言葉であつたに違いない。

そうしたなか、時事新報での東風野人の言葉が中村を勇気づけた。「…「水の都ヴェニス」に對して、私は今更に其イリュウジョンを傷ふやうな實見者の言葉は耳にしたくないのである。」とヴェニス批判に蓋をし、「…今迄、「水の都ヴェニス」に遊ぶの機會を得ざつたを本意なく思つてゐた、私は、今更に「水の都ヴェニス」に到らずして永久にこの一都市を夢の國地上の樂園として忘れざるを得ることを、却つて其歡びとも誇りとしよう。」とヴェニスの幻想を永遠のものとしようとしていた。この記述がまさに、中村のヴェニスに對する想い代弁してくれている。(恐らく中村もヴェニスに訪れたことはないのであろう。)つまり、中村にとってヴェニスとは、ノスタルジアの対象であり、幻想の中に生きる、永遠の美なのである。

では、次に、堀割について見ていこう。

「…潮が満つると水は堀割に湧れそうに堪えて、橋やら、柳やら、岸の家やらが皆逆に映る。其時傳馬船は長い竿をひをらしてゆるく滑つて來る。潮が引き去ると兩岸の石垣下の土が表はれて繋いであつた船が横様に寝そべつてしまう。春先の朝早く潮が油の様に堪えたのに空がどんより曇つた絹糸の様な雨がふるのもよい。夏の宵白い浴衣と團扇が橋の上に列ぶのもよい。夜更けて打濕つた氣の中に柳の間の瓦斯の灯がぼうつと水に映るのもよい。寒い風が吹いて小波が立つ時横斜に降り込む白雪を見ながら湯歸りに欄干に立つのもよい。更に月の夜の満潮雨の日に岸行唐傘など限りない趣がある。暫く築地邊へ住んで居た私には忘るゝ事の出来ない懷しさである。更に江東の方に行くと古い江戸の面影をも偲ばるゝ。」

少し長い引用になってしまったが、中村が水上公園計画を描くきっかけを説明した際、堀割の趣について語られた一文である。ここからも、堀割に對する想いとそこから覗く爛熟した江戸の情緒に趣を感じていることが伝わってくる。つまり、中村が抱く堀割への趣は同時に江戸への趣でもあつたのである。

ところで、そもそも江戸から明治に代わり 45 年、時代は大正へと移るなかで、なぜ江戸にまなざしを向けたのであろうか。

内向期

槌田満文が著書『明治東京歳時記』で「明治以後の日本は、外向的な外来文化の受容と内向的な日本回帰による拒絶をくりかえしてきた。」と述べるように、この時期は、西洋文化の輸入によって西洋化を目指した外向期から、物事の本質や可能性を内に求め出す、内向期に転換した時期であった。

そうした動きは、文学界では、江戸の面影を記述して回った永井荷風をはじめ、東京の中に西洋の美を見出したパンの会が。建築界では伊藤忠太が法隆寺に、武田五一が茶室に日本建築の本質を発見し、後藤慶二や分離派建築会といった大正期の若い建築家が、過去の建築様式から脱却し、自己の内側からわきあがる感情を表現しようとした動きに見られる。そして中村鎮もこうした時代の一人であった。

「吾々が覺めて來つて自我なるものを意識した時、自己の成しつつある事が案外コンベンショナルなものである事を見出し此の古い型に囚れたくない、如何にかして此の型を脱け出でたい吾々の新しい國を開拓して其處に若い吾々の旗を建てたい、と云ふ革命的な氣風が今までの系統的藝術に對して極端に酔して來る。そして其時に馳集した者は皆申し合わせた様に自己の感じや氣持を何ものにも煩はさるゝ事なく勝手氣儘な手法で描いて見たいと云ふ行き方なのである……今の日本はあの新緑の様な氣の溢れ出る様な藝術の出來なければならぬ時である。……今は若い諸君や我々の時代である。」 『新しい畫家の作品を見て』

時代の変化を敏感に感じていた中村は、現在を新しい時代であり、若い我々の時代、そして古い型から脱却し、新しいものを創造する時代であると叫ぶ。しかし一方で、

「…獨逸や奧太利のおぼつかなげな技巧を眞似て其が何だ。まして全く性質の異つた國民にもものを。折角古い型から逸れ出て來た吾々が又新しいと云ふ名に惚れて小さい型に囚へられるのは不見識ではないか。」
『セセッションの生命』

と新しいからといって、その型にとらわれていては今までと全く同じであると注意を促したうえで、

「藝術は何處までも自己の表現である。其オリジナリチーの強い處に其人の天才をうかゞう事が出来るのである。如何に巧なる模倣も遂に拙い創作に及ばないのである。…創作と模倣とは遂に同席するを許されないのだ。…一度ふりかへつて自己なるものをよく見て見なくてはいかぬ。自己の思想や趣味と云ふものは決して一朝一夕に向上するものでないと云ふ事に氣がつかれたならば、手法などはこの次の話、先づ自己を作らなければならぬ、手法の美術なるものは眞の意義の美術ではないのである。古い時代の技巧の幼稚な美術が眼のある人に喜ばるゝのは其の錆のあるからであるばかりではないのである。たとへ幼くとも自己なるものを巧まず、虚飾せず表はした處に其個性が強く表はれて居て、千古の後までも光があるわけなのである。」
『開拓者』

と芸術は自己の表現であり、真似や模倣ではなく自己の内面に「真」があり、

「…物の趣を解すると云ふ事は建築家や裝飾家の片時も忘れてはならぬ大切な事です。…「趣」之を解しない人は物の内在的美を知らない人です。」 『桌上餘録』
と内在する美が「趣」を醸し出すと述べる。

つまり中村は、明治という模倣の時代から脱却し、自己の内面に目を向け、「真」なる芸術をどのように創造し、新たな時代を切り開くかということを考えていたのである。このような考えのなかで、東京というものをとらえようとしたとき、中村は、東京が内在する「真」なる姿を江戸にとらえ、江戸を堀割の風景に見出したのである。

こうして、中村は江戸へとまなざしを向けることで、東京の本質を堀割に見出したのである。つまり、近代化を迎え、都市化する東京において、今なお江戸の風情を見せてくれる堀割に趣を感じ、そこに東京の内在する「真」を見出した。それは一方で、世界から距離を取り、独自の文化を発展させるも、近代化により失われつつある江戸を懐かしむことでもあった。そうした想いが、ノスタルジーの対象として、幻想を抱くヴェニスと結びついたのである。

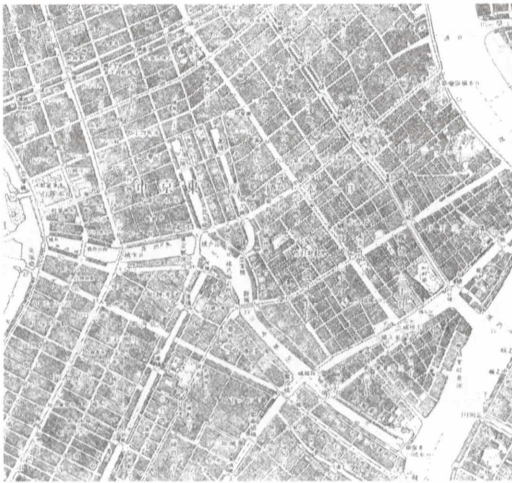


図 1-4 明治 42 年計画地周辺地図

4. 伝統と近代の融合

ヴェニスに幻想を抱き、江戸の堀割に趣を感じていた中村のなかで、両者は結びつき生まれた水上公園計画。では何故、計画地にこの場所を選んだのか。計画案の中でも、ヴェニスとの結びつきを理由にあげているが、それだけではない。中村がこの場所を選んだ理由は、水上公園計画で描きたかった理想、言い換えるならば、中村が構想した東京の姿が表現できる場であったからである。

水都江戸と東京の近代化

水上公園計画の計画地をもう一度見てみよう。江戸橋、荒布橋、思案橋、鎧橋、兜橋に囲まれた運河の集合点、そのすぐ隣には日本橋がある。日本橋は江戸時代から商業の中心地として舟運と人々が賑わう江戸の名所であった。そんな日本橋が隣にあることから、この運河の結節点も当然舟の往来の激しい場所であり、まさに水都江戸を代表する場であったと言える。

しかし、明治に入りここは、西洋化を代表する場へと変わっていく。かつての名所であった日本橋も太鼓橋から水平の橋へと架け替えられ、交通の主役が陸に代わったことを物語。それは一方で、近代化の象徴でもあった。

また、それに合わせて周囲の建築も変わる。海運橋近くに建てられた第一国立銀行の擬洋風建築は錦絵にもなり、見物客が絶えなかったと言う。まさに文明開化を象徴する建物であった。

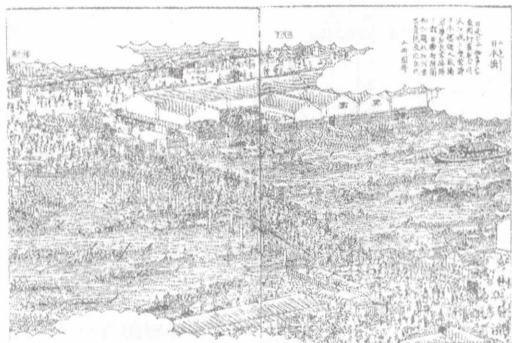


図 1-5 江戸名所として描かれた日本橋



図 1-6 日本橋（太鼓橋）

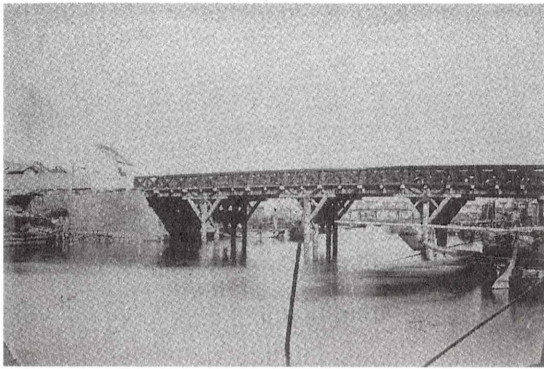


図 1-7 日本橋（水平橋）



図 1-8 第一国立銀行



図 1-9 江戸橋郵便局



図 1-10 渋沢栄一自邸が描かれた兜町



図 1-11 舁と蔵が並ぶ風景

その他にも江戸橋郵便局や兜町のビジネス街（一方で、渋沢栄一が兜町においてベネチアンゴシック様式の自邸を建設したことからも、水辺と洋館が織りなす風景をヴェニスと重ね合わせた節もあり、中村が言う様にヴェニスとは結びつきやすい場所であったことは間違いない。）など西洋風の建築や街並みがつくられ、東京の中心地として西洋化を積極的に進められた。つまり江戸から東京への変化が最も顕著な場所であったと言える。

しかし、明治後期においても、舁と蔵が並ぶ江戸の風景は残り、水都江戸の面影は生きていた。永井荷風も『日和下駄 一名東京散策記』にて、この場所を「東京市内の堀割の中にて最も偉大なる壮観を呈する処となす。」と述べ、夜景は「銀座街頭の燈火より遥に美麗である。」とこの場所の特異性を見出していた。

このように、江戸時代に商業の中心地として舟運と人々と賑わう日本橋を隣に、水都江戸を体現していた場所であったが、明治の始まりと共に積極的に西洋化が進み、近代化の顕著な場所でもあった。しかし一方で江戸の面影は生きていた。

つまり、この場所は江戸と東京との関係が最も顕著に見出せる場所であり、両者を結びつけるうえではうってつけの場所であったのである。

そして、その関係性を明治へのアンチテーゼとして表現したのが、妻木頼黄によって設計された日本橋であり、中村が描いた水上公園計画とは決して無関係ではないであろう。



図 1-12 日本橋の絵葉書

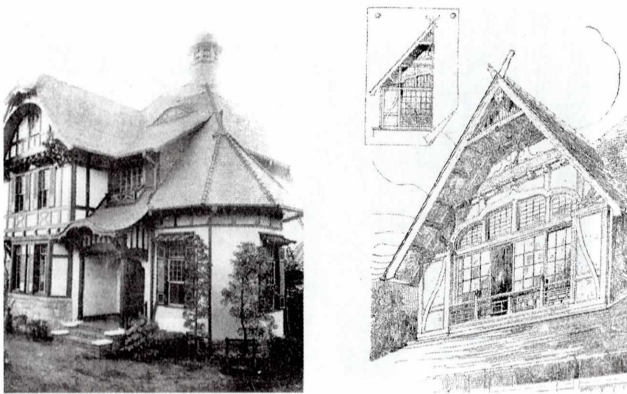


図 1-13 妻木自邸のデザイン

妻木頼黄の日本橋

日本橋が完成したのは、明治 44 年の 4 月で、中村が『東京のヴェニス』を雑誌に載せる前である。この日本橋で装飾面の監修をしたのが、妻木頼黄であった。

妻木頼黄は、安政 6 年 (1859) に江戸で生まれ、明治 11 年に工部大学造家学科に入学し、明治から大正にかけて活躍した建築家である。現在国指定文化財にもなっている、神奈川県立歴史博物館 (旧横浜正金銀行本店本館) の設計も妻木によるものである。

そんな妻木も、日本の本質を模索していた一人であった。それは、自邸のデザインからもうかがえる。

さて、妻木によって装飾された日本橋を、中村鎮の恩師であり、早稲田の教授であった、佐藤功一は『時事新聞 新日本橋批評』で、次のように批判する。

「…帝都の中央に日本では珍しいアーチ形石造の橋が出来たと云ふことは返す返すも喜ばしいことである。」と述べるも「…下を通る舟からで無くては見え無い橋の裏側の方、つまり人々の歩く表

面と反対の側、即ち、水に向いて居る方にまで花崗岩の立派な切石を惜気も無く使つてあることなどは、慥に無駄な費用であつて、少し口が悪いやうであるが下世話に云ふ「溝の中へ金を投げた」やうな嫌が無いでも無い。あゝ云ふ所などは鉄筋コンクリートなどでやつた方が比較的工事也容易で又堅固でもあり、それに費用が大分違うことと思ふそして、それから浮いて来る金を以て比較的寂しい橋の両袂を飾るやうにした方が遙かに得策であつたやうに思はれる。」と批判する。

しかし、これは長谷川堯が『都市回廊』で指摘するように、視点を水上からに変えると妻木が日本橋に込めた想いが分かり、佐藤功一の批判がある意味で、妻木の意図を代弁していることがうかがえる。

つまり、この日本橋のメインストリートは陸路ではなく水路であつた。そのために「水に向いて居る方にまで花崗岩の立派な切石を惜気も無く使つて」いるのであり、佐藤功一の言う裏は妻木にとって表であつたのである。

そのうえで、長谷川堯は「彼はあたかもパリの目抜き大通りシャン・ゼリゼの一方の端がエトワール広場の有名な凱旋門ではじまるのと同じように、明治国家の胎内に反明治の拠点として幻想の都市の凱旋門として新日本橋を建造し、続く水のブルヴァールの奥に同じく幻のカテドラル、つまり明治六年五月五日に火災で消えた江戸城本丸の楼閣を鮮明に虚視していたのである。」と夢想する。

つまり、妻木頼黄はこの日本橋の建設において、陸の都市明治への反発と水都江戸の復権を体現して見せたのである。

このように、日本橋において江戸と東京の関係性を体現したことは偶然ではないであろう。つまり、それ

だけこの場所は江戸と東京との関係が最も顕著に見出せる場所であり、両者を結びつけるうえではうってつけの場所であったのである。

そして、中村もこれに影響を受けたことは間違いない。しかし、中村が描いた絵は、妻木とは異なるものであった。

浅草式公園

中村はこの場所に、公園をしかも浅草式の公園を計画した。それは、下町で働く人々のための公園であり、疲れを癒す娯楽場の機能を持たせようとしていた。確かにこの時代、公園・娯楽場といえば誰もが浅草を想像するであろう、それだけ浅草は隆盛を極めていた。しかし、ここで注目したいのは浅草の盛り場・娯楽場としての性格よりも、その伝統と近代の融合が生み出した独自の空間の方である。



図 1-14 隆盛を極める大正期の浅草

浅草は、628 年に漁師の網にかかった観音様を祀ったのが始まりであると言われ、江戸時代には幕府の祈願所として定められた宗教空間であった。土地柄、江戸の際であり、また宗教空間というハレの空間において、奥山に見世物小屋、墨堤には桜、猿若町には芝居小屋、そして吉原の遊郭と、名所や悪所と結びつくことで、江戸随一の盛り場として栄えたのである。また、『東京の空間人類学』では似たような繁栄をした深川と比較して、浅草の隆盛は明確な空間秩序と回遊性をもっていたことが要因であると述べている。

このように、江戸の名所の一つとして、名をはせていた浅草。時代が明治に入ってもその勢いは衰えることはなかった。明治 6 年の太政官布達により 5 つの社寺が公園として指定され、浅草もその一つであった。その後明治 15 年に公園地として整備が始まり、浅草田圃の埋立てや仲見世通りの煉瓦造化、そして公園内を 6 つの区に分割するなど大規模なものであり、江戸時代からの風景は一変した。

しかし、浅草の勢いは衰えず、むしろさらに勢いを増した。奥山にあった見世物小屋が六区へと移転されるも、六区が興行街として盛り場の核となり、明治 23 年には浅草のシンボルとなる凌雲閣、通称、浅草十二階が建設される。明治 40 年以降には、活動写真館や浅草オペラなど西洋を起源とする娯楽文化が入り、また、建築も洋風になるなど、浅草は隆盛を極めていったのである。

このように、江戸からの盛り場であった浅草が、明治に入り、公園として整備されていく中であっても、明確な空間秩序や回遊性といった伝統性は失われることはなく、むしろ名所や悪所が浅草公園内に密集したことで、より濃密になったのである。そして、その上に西洋文化が加わることで、浅草はさらなる発展を遂げていく。つまり、近代の民衆娯楽地であった浅草とは、江戸の伝統のうえに西洋文化が吸収され、近代化した、まさに伝統と近代が融合した民衆娯楽地であったのである。

このことから、中村の言う浅草式の公園とは、民衆娯楽地としての性格と同時に、伝統の上に近代が共存し、融合した空間を構想していたのである。その考えは、次の文面からもうかがえる。

「…やつぱり吾々には畫家や、彫刻家が自然や人間を手本にする様に古人のやつた建築を師として、之に吾々の新しい思想を加へて行くより外はないじやありませんか。畫家がモデルを用ひた處で其描いた繪が寫眞と同様のものになりはしないじやありませんか。即ち客觀から來た流を、自分の胸の中に入れて此處で濾過して、新しい自己の血汐を融したのですもの、出來た製作は唯の水ではなくて自己の一部が其中心に漲つて居るのです。クラシックやゴシックやサラセニックを取つて來ても唯之を其のまゝ模寫するのではなく自己の心で濾して來れば其で立派な藝術品ではありませんか。客觀のフレッシュを求めるのもさる事ながら、私はそれよりも自己の心を濁さぬ様にする方が餘程より多く大切な事と思ひます。」 『開拓者』

過去のものや、新しいものを自己のフィルターを通して表現することで新たなものを作り出すべきだと述べる。それは言い換えるならば、新しく輸入されるものをただ模倣し上書きするのではなく、伝統や本来のものを透して新しいものを表現すること、つまりは融合である。そのような考えが、浅草のような伝統と近代が融合した空間に惹かれ、水上公園に活用したのである。そして、その構想は後の外濠の埋立てでの議論の場からも見ることが出来る。

「吾々は前の時代があつて初めてそれに對する吾々の時代を劃することが出来る。又吾々の時代があつてこそ吾々の子孫の時代がよい輝かしいものとして繼がれ得る。この意味に於て總ての民族總ての文化は傳統적인ものである。それを決して忘れてはならない。その意味に於て吾々は吾々の時代になる迄の歴史を尊重したい。…吾々は前の時代を尊重する。然しその前の時代は吾々の時代を進むる助けにこそなれ、吾々の時代を進める防げになつてはならない。」 『古い時代と新しい時代 一外濠埋立に就いて一』

外濠の埋立に対して運河として役に立たない所は埋め立て公園にし、役に立つ所や風致の良い所は保存するという、残す、埋めるの二者択一ではなく、積極的な両者の共存を図っている。そして、これが水上公園計画において、中村が浅草式の公園を構想した意図なのである。

5. 結び ～江戸の復権と共存～

ヴェニスに幻想を抱き、西洋様式の模倣に対する疑問から自己の内面にまなざしを向け、いわゆる「真」なるものを見出そうとする中村は、まさにこの時代の若い建築家のひとりであった。

そして、内面へと向かうまなざしから、東京が内在する“真”を江戸ととらえ江戸の風情を堀割に見出した。それは、かつての栄華な姿を守り続けている（そう信じている）幻想抱くヴェニスと通じるものがあり、そのような背景から堀割を介して、ヴェニスと江戸を結びつけ、水上公園計画を構想したのであった。それは、言葉を換えれば、前時代のものに価値を見出す行為であり、まさに水都江戸の復権を意図していたと言える。

また、そのような意図は、敷地にも表れ、場所はまさに江戸から東京への変化を最も見て取れる場であった。しかし、そのような場所に水都江戸の復権を陸の都市明治へのアンチテーゼとして体现した妻木の日本橋のような表し方をするのではなく、中村は浅草の様な公園を計画した。これは前時代である江戸を否定することで近代化を進めるのではなく、浅草を参考に、江戸のうえに西洋文化を融合することで、日本の近代化を図ろうとしたのであり、この計画で意図したことは、江戸の復権と共存であった。

以上より、中村は、東京の近代化は避けられないものとして受け入れるも、東京は江戸の連続であり、江戸のうえに西洋文化を融合することで近代化を成し遂げることが、東京のあるべき姿であると考えていたのである。

2 章 新都市のアイデア

1. 田中智学 新都市への夢

大正8年(1919)都市計画法と市街地建築物法が制定された。これは、日本が都市の時代に入ったことを物語ると同時に、都市問題が深刻化したことを示す。そしてその翌年、宗教家田中智学によって、『東京新都市論』が発表される。そこには壮大な計画が構想されていた。



図 2-1 田中智学

田中智学は、文久元年(1861)多田家の三男・巴之助として日本橋に生まれる。幼少期に両親を亡くし、10歳で日蓮宗門に入ると、法名を智学と授けられ、後の戸籍法改正により田中の姓を名乗る。ここに田中智学が誕生する。その後、日蓮宗の宗風に疑問を感じた田中は、独学で研究し、明治13年に横浜で「蓮華会」を起こす。明治17年に東京に移ると「立正安国会」を設立し、大正3年には各教団を総括して「国柱会」を創立した。田中はその生涯で全国各地を巡講し、また数々の執筆活動で、日蓮主義を説いてまわった。また、田中に影響を受けた者も多く、坪内逍遙や北原白秋、宮沢賢治などの名があがる。そして、昭和14年(1939)79歳でこの世を去る。

田中智学は実に多方面な人であった。数々の書物を刊行しただけでなく、和歌や俳句をつくり、劇も上演し、株式会社をつくったり、商店を開いたりもした。なかでも建築に非常に興味があったようで、様々な場所に家を建て、その家も自ら図面を引くほどであった。そんな田中が、60歳の時、病気の療養中に書かれたのが、『東京新都市論』である。ちなみに、『東京新都市論』は大正9年に、自身が創刊した雑誌『毒鼓』に載せたものであり、後に天業民報社から出版された。

「此頃の東京を見ては、意地にも我慢が出来ない、あの塵埃の濛々たるけがれの都、あの電車の轟々たる地獄の叫び、自動車の揚げる煙塵と悪臭と泥の迸り、馬力のずうずうしさ、自轉車の目まぐるしさ、天下の往來も命がけでなくては歩けぬ現状は、路往く人としていかんとも我慢が出来ぬ…」

こんな書き出しから始まる『東京新都市論』の序論で、田中は東京の四大欠点として、不便、不経済、非衛生、無趣味を挙げている。そして、当時の東京を、「少なくとも今の東京市は、人を悪化するすべての事物を豊富に陳列して居る展覧會である、「人心悪化の都」「物貨騰貴の都」「塵埃の都」「泥濘の都」「不潔の都」「不便の都」「無性の都」「無趣味の都」「病氣製造の都」「人殺の都」百害百惡ありて一利一善のない、疾くに改造さるべき都市である。」とひどい言いようである。

つまり、陸運による害悪が東京を悪化させていると考え、「日本一國の首腦とも代表ともいべき大帝都を…」そして、「活きた模範を示さう」という想いから解決案として、海に商業中心の理想的都市の建造を構想したのである。そうすることで、「…品物は損傷せず、運賃はやすくついて、道路は少しもいたまず、「塵」の憂もなく「泥」の恐れもなく、人は安んじて業を営み、往來する人も安全で綺麗で静かで便利で、のびのびとして生活がして行ける。」と東京の未来を描いている。

つまり、現況の東京を憂い、その原因が陸運であると考えた田中は、その解決案として、海上に理想の新都市を建造することで、東京の改良を構想したのである。

2. 東京新都市論

現況の東京を「人殺の都」とまで蔑み、改造の必要から、海上に商業中心の新都市を構想した田中。その新都市の構想とはどのようなものであったのか。

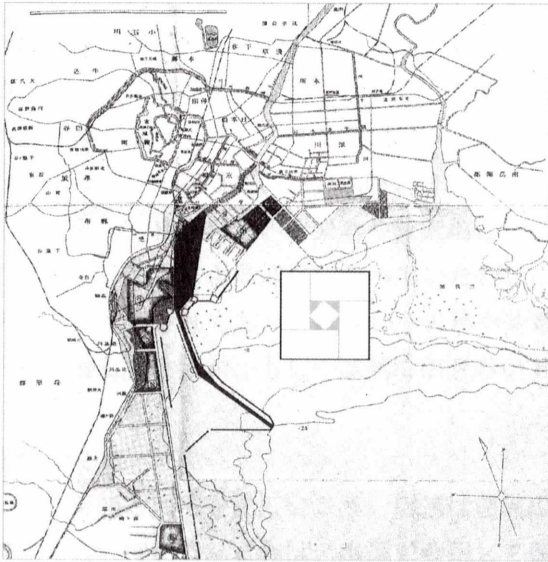


図 2-2 新都市構想—推測配置図

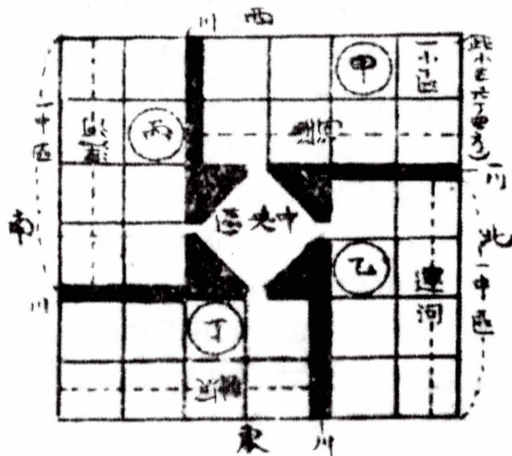


図 2-3 新都市構想—街区構成

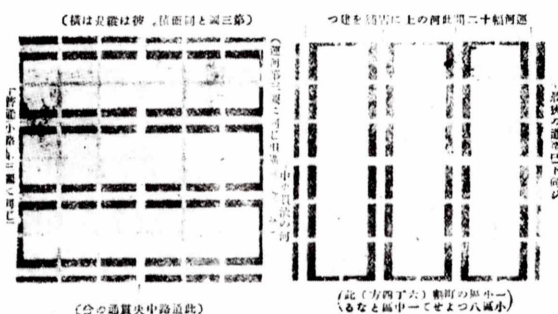


図 2-4 新都市構想—交通計画

外形

「…「海」といへば、「品川」から「芝区」「京橋区」「深川区」の接續點をうまく考へて、應用に有利で、且つあまり費用の澤山にかゝらぬ比較的適當の地點を埋立てるのである。」と言うように、明確な場所は決めてないものの、東京湾築港も視野に入れていることから、図 2-2 のような場所と推測される。

規模は、一里四方を構想しているようである。一里は約 3.93km であるから、面積は約 15.4km² となり、現在の中野区(約 15.59km²)や渋谷区(約 15.11km²)ぐらいの規模である。「…「日本橋区」の一區が全部からあきになる見當であるから…」と述べていることから、大がかりな構想であることがわかる。

では、その一里四方をどうするのかというと、これを 5 つの区に卍の形に分け、それぞれ幅 30 間(1 間=約 1.8m)の大河川で区切っている。卍形とはまた、宗教者ならではの思いは否めないが、中心性が強く象徴される街区構成である。

街区を見ていこう。中心の街区は中央公園区と呼び、公園や学校、役所、病院などにはじまり、劇場や活動写真館などの娯楽施設まで、あらゆる公共的な施設が配置されている。周辺の 4 つの街区は各々中区と呼び、6 丁四方(1 丁=60 間:約 108m)を 1 小区とする 8 小区で 1 中区が形成されており、それぞれ産業地帯として、店舗と住宅が配置されている。

交通

外形が分かったところで、続いて道路を見ていきたい。この新都市は、陸運の害への不満から生まれたものであるから、主流はやはり水路である。まず、5 つの区を分かち大河川(幅 30 間)があり、各中区には区を貫流する大運河(幅 20 間)と店舗の下に東西に流れる運河(幅 12 間)がある。そして、中央区の四隅には、小港が設けられており、小港に集められた貨物を舟に

乗せて、運河を通り、各店舗まで運ぶといった光景が想像できる。

また、橋梁についても言及しており、大河川（幅 30 間）の橋梁は、鉄橋にして優美と堅牢を兼ね、歩車分離を行い、その他の運河には、装飾のない、実用重視の堅牢な橋梁としている。しかし、中央公園区への橋梁は別で、一大橋として市街の美観を担う立派な橋が構想されており、その橋梁の下を夏場の「納涼場」への利用も考えている。

陸路についてもしっかりと計画されている。

陸路は大道路（幅 20 間）、中道路（幅 12 間）、小道路（幅 6 間）の 3 種類があり、1 丁ごとに縦横に網目のように小道路が通っており、数丁して中道路に通じ、大道路へとつながる。大道路の背には同じく幅 20 間の大道路が通っており、その下にはトンネルが掘られ、地下には電車が走り、上下水道やガス、電線などのライフラインも通っている。また、その大道路は地上よりも 10 尺（1 尺=0.303m）以上高いらしく、道路というよりも、桜を植え、行楽地や散策地としての利用を構想している。

そして、陸運による塵埃に憤っていただけない、道路は絶対に塵がたたないように、すべてコンクリートかアスファルト化されており、区外からの馬車や普通の貨物車はいっさい入れず、区外で区内用のゴム輪のついた車に移し替えるか、もしくは船に引き継いで区内へと運ぶという徹底ぶりである。

店舗と住宅

次に店舗と住宅を見ていこう。店舗は運河の上に建てられている。これは、水運を利用して運ばれた貨物を、直接店舗へ荷揚げすることを念頭に考え出されたものであり、「…椽の下を船が通って、床下から荷揚げの出来る市街は恐らく西洋にもあるまい。」と述べるように、この海上新都市の見せ場であり、田中の自信作である。このようにすることで、水運が利用でき、商品を傷めずに運ぶことができるのである。

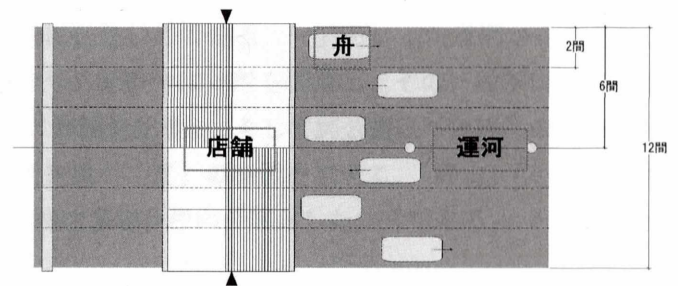


図 2-5 新都市構想—店舗・住宅計画

では、田中の自信作について具体的に見ていこう。まず、運河（幅 12 間）の中央を支柱で仕切り、幅 6 間ずつの 2 つの運河に分ける。それぞれの運河（幅 6 間）において、外側 2 間ずつを舟の往復にあて、中央の残り 2 間を荷揚げのためにあてる。これは、往来中の舟と荷揚げのために留まっている舟がぶつからないようにするためである。そして、その運河の上に、中央の支柱を頼りに、双方から床桁を渡し、背中合わせに店舗を建てていく。こうすることで、店舗の中にも、運河中央の荷揚げ場にあたる適当な場所の床板を外せば、荷物が運河から直接運び入れることができるという構造になっている。また、運河による荷揚げのために、軒燈ならぬ床燈なるもので、所在を示そうというアイディアも添えている。

海上に建てられる店舗は、間口 5 間、奥行き 6 間を基本に建てられ、運河が東西に流れていることから、自然と南北に向くようになっている。これは「商品の朝日夕日に傷まないため」という考慮からである。また、「純商業家屋」と述べているも、別の文面で居住者を想定していることから、おそらくは町家のような住居併設店舗を構想していると思われる。

そして、この運河で用いられる舟についても言及しており、舟は幅 8 尺の長さ 3 間ほどの統一した形式でつくり、その一端に滑車を備え付け、電力で動かすことを構想している。これは京都のインクラインから着想を得たものである。また、この運河を走る舟は、貨物運搬だけでなく、乗客専用の「快速美船」なるもの

も構想しており、2～3丁ごとに乗降場を設けている。

一般住宅については、先の運河店舗の筋と筋の間に建てられており、基本的には住居専用であるが、街路に面している住宅は商店としての営業も認めている。また、トンネルが通る大道路の上も、閑静な住宅地としての利用を考えており。建てた住宅の背中合わせに倉庫を設け、店舗との接続を考えている。

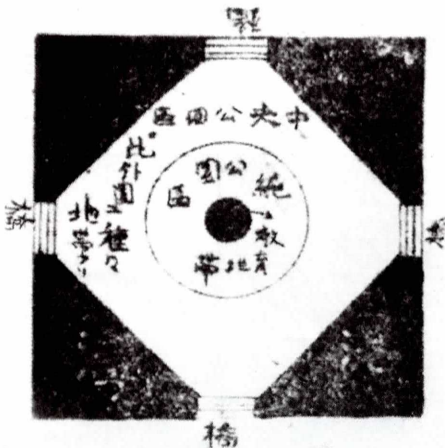


図 2-6 新都市構想—中央公園区

中央公園区

さて次に、中央公園区を見ていこう。中央公園区は卍形の中心に位置し、周辺の中区から大きな橋を渡って入るようになっている。敷地内は、同心円状にエリア分けされており、中心を神聖区域とし、順に教育地帯、純公園区となる。純公園区の外円には、病院や国内外の産業館、区役所や銀行、劇場や活動写真館など様々な公共施設が地帯ごとに配置されており、純公園区内中央の教育地帯には学校や図書館があり、周りよりも高く丘になっている。これは、「…この一廓は尤も神聖に且つ高雅幽趣兼ね備はる様にしたいから、その中央部に高丘を築き、森嚴なる林を造り、幽邃淨恬の状を模して、その間に校舎堂觀を點綴し、自然と野鄙喧騒の氣を脱する様にしたいのである、…」といった意図からであり、

教育地帯中央の最も高い場所に神聖区域として森林を造り、その中に神殿を配置し、その一段下に学校を置き、そのまた一段下に図書館を列ね、さらにその一段下に庭園を配置し、そして純公園区へと続くのである。

純公園区は、「…「上野」の壯麗に、「日比谷」の快活を具へ「芝」の幽雅を加えて、「岡山」「小石川」兩後樂園の巧緻を兼ねて、それへ「奈良」の鹿を配したる様な多趣多様の公園としたいのである。」とまさに理想の公園を構想している。

以上、田中が描いた海上新都市の外形、街区の構成と構造、交通、店舗、住宅を見てきたわけだが、ここで、他にも希望事項という項目を設けて、事細かな構想が描かれているので、簡単に触れておきたい。

希望事項

まず、この海上新都市に建てられる建物は、学校等の特別な施設を除いて、すべて陸屋根とし、屋上庭園化を構想している。そうすることで、夏場は涼しくなり、また畑として利用することで、家計の足しになるなどのメリットを挙げている。これは「…現に私は鶯谷の家を、自身の邸宅でも実践している爾ういふ風に造った…」と述べるように、自邸での実体験から生まれた構想である。

次に名称についてである。中央公園区内は全体を「大正公園」、純公園区を「明治公園」とし、個々の場所に応じて、「桜が丘」等の名称を付けており、中区を貫く少し高くなっている道路も、行楽地や散策地として構想していることから「桜堤」や桜の名所にちなんで「新隅田」や「新吉野」等の名を付けている。しかし、固有の名称が付けられる一方で、各中区の町名や河川・運河の名称は、方位や数字だけで付けられている。例えば、「西中区西一條南一丁目」や「朱雀川」、「東一番川」といった具合である。これは、場所を把握しやすいように付けたものであり、京都や大阪に倣って付けていると述べている。

そして最後に、新都市の築造についてである。田中は新都市築造の際に、労働者として、全国の受刑者を利用することを構想している。これは、新都市築造の労働を通して、受刑者の教育を図るものであり、宗教者としての立場や考えがうかがえる構想である。

このように、建築や都市の素人でありながら、自身の経験を頼りに、事細かに新都市を計画した田中。素人であるがゆえに、全体の整合性がまとまっておらず、全体図が見えにくいことは残念であるが、一方で敷地の坪数や築造費の計算にまで考え及んでいる。つまり、田中が構想した新都市とは、水運を主体とした理想の商業中心地であった。では、そんな東京新都市論が、何を意味するのか、見ていこう。

3. 田園都市思想

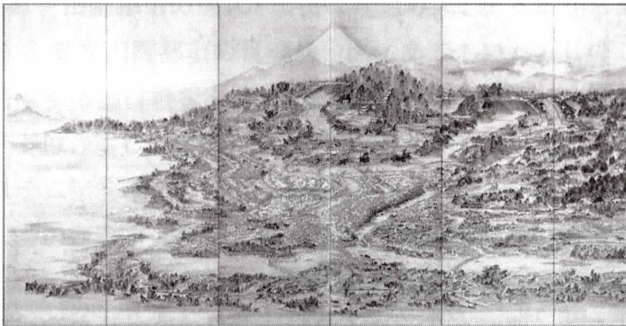


図 2-7 水運豊かな江戸が描かれた絵図

江戸時代、運搬の主流は水運であった。舳が通りやすいように盛り上がった橋は太鼓橋と呼ばれ、いたるところに架けられおり、日本橋や両国橋の光景は浮世絵にも描かれる名所であった。また、西洋などの城が壁で囲うのに対し、日本は濠で囲っていたことから、水との繋がりの深さがうかがえる。

しかし、明治に代わるとともに、近代化が日本にも起こった。それは、いわば陸化であったとも言える。橋は水平になり、堀割やお濠が埋められ、川は

道路へと変わっていった。そしてその上を車が、馬車が、電車がうなりと塵埃をあげて走り出す。大正になると、都市化とともにその数は増え、都市問題のひとつとして挙がるようになり、道路の改良の声もあがる。

このような背景のなか、陸運に対する不満とiraだちが、田中に海上へ新都市をつくるという発想をもたらしたことはすでに見てきたが、そもそも新都市という発想はどこから生まれたものなのであろうか。

これは、やはり当時の流行でもあった、ハワードの田園都市が大きく影響していることが推測される。

ハワードの田園都市論

「田園都市」とは、産業革命によって、都市への人口集中が引き起こした都市問題に悩むロンドンにおいて、エベザネー・ハワードによって提唱された新しい都市像である。

これは、1898 年にハワードによって自費出版された『明日—真の改革にいたる平和な道』の中で、論じられたものである。（世界に広く読まれているのは、4 年後に改訂された『明日の田園都市』の方である。）

なお、ハワードの田園都市論については、様々な書籍で詳しく説明されているので、ここでは、概要と特徴を述べるに留めておきたい。では見ていこう。

一市民であったハワードが提唱した「田園都市」とは、都市でも農村でもない第三の選択肢としての存在であり、いわば、都市と農村の良い所を統合した都市であった。

田園都市は、都心部と田園部から成り、都心部を囲むように田園部が配置されている。都心部の中心には庭園が置かれ、その周りを、市役所や劇場、病院といった公共施設が取り囲み、さらに外側を中央公園が取り囲んでいる。そして、その中央公園の外周は「水晶宮」と呼ばれるガラスのアーケードが取り囲み、ショッピングやレクリエーションの場として利用され、その外を 4 つの環状街路が取り囲み、街路に沿うように住宅が配置されている。途中にはガーデンアヴェニューと呼ばれる緑地帯も設けられている。そして都市部

の外周には、工場や倉庫、市場などの労働、物流の場があり、最外周に環状鉄道が走り、田園部へと広がる同心円状の構造になっている。また、田園都市内の機械は全部、電気を動力としているので、スモッグのないきれいな都市であることも述べている。

さて、ハワードが書いた『明日の田園都市』は序文を含め、全14章から成っている。しかし、田園都市の空間の記述は第1章と第12章に少し触れているだけで、第2章から第5章までの4章を田園都市の歳入・歳出の仕組みに、第6章から第8章までの3章を田園都市の管理や組織にあてている。このことから、田園都市論は経営システムに重きが置かれたものであり、ハワードは、新しい都市の‘イメージ’ではなく、新しい都市の‘システム’を示そうとしていたことがうかがえる。

そのことを踏まえて、ハワードの田園都市の特徴を二つあげたい。まず一つ目は、田園都市の自立性である。半分以上ものページを費やして詳細な経営システムを説明したことからもわかるように、田園都市とは、都市に頼るでもなく、農村に頼るでもない、田園都市内で働き、生活するという自己完結した「自立都市」なのである。

そして二つ目が、旧都市との関係である。田園都市はその自立性から、しばしば、旧都市の破壊と勘違いされることがある。例えばある機関誌では「ハワード氏はロンドンを取り壊し、定規とコンパスで美しく計画された田園都市に置き換えるよう提案している。…われわれは既存の都市をこそ、改革していくべきなのだ。」という批評がされている。しかし、ハワードは自身の著書の最後の章で、そのことに触れており、田園都市の成功は、ロンドンの人口と地価を急激に下落させ、「古くさく疲れ果てて見える過密都市」とロンドンの魅力の低下を招くことになるが、そうなることで、やっとロンドンの再建が可能になると述べている。やや過激な表現ではあるが、つまり、田園都市は、自己完結で終わりではなく、旧都市の再建を視野に入れた提案なのである。

郊外住宅地としての田園都市

このようなハワードの田園都市論は、瞬く間に世界に広がっていった。それは、ちょうど世界でも都市の過密化による都市問題で悩まされており、世界各国で解決案の模索が行われていた背景がある。しかし、ハワードの理念とは裏腹に、田園都市が純粋に活用されたわけではなく、都市に対する郊外住宅地として、田園都市が利用されたのである。その原因は、様々な人が指摘し、ハワード自身も晩年「私が『明日』を出版して以来、田園都市という言葉はさまざまに展開してきた。さらには都市計画という言葉にまで発展してきた。しかし私は思う。いったいどれほどの人が私の本を読んでくれたのであろうか。私はいまだ、田園都市なるものが真に理解されてはいないと思う。」と述べるように、世界各地に田園都市を広めたのは、『明日の田園都市』ではなく、レッチワースなどの田園都市思想によってつくられた実例であった。

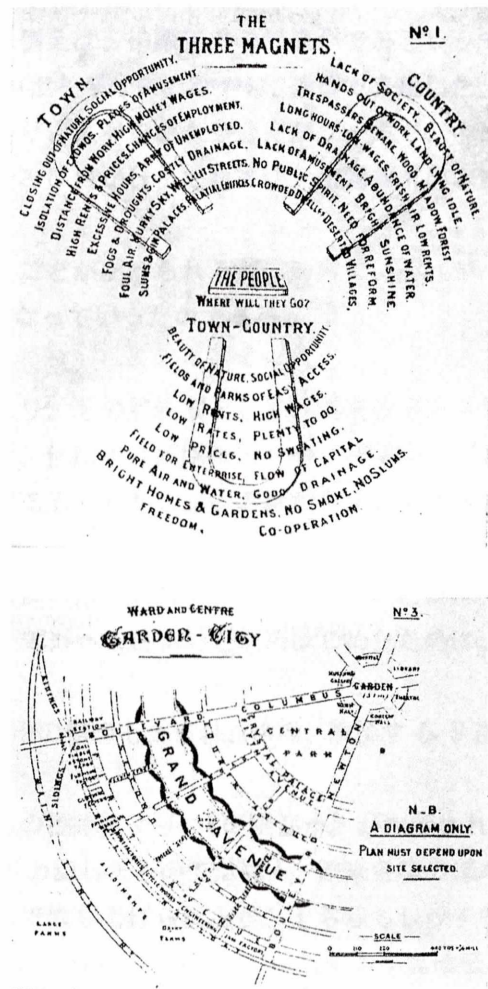


図 2-8 ハワードの田園都市概念図

『明日の田園都市』には具体的なイメージスケッチはなく、あるのはダイアグラムのみであり、実際に建設したのは、そのダイアグラムをもとに設計した建築家であった。例えば、田園都市の代表作であるレッチワースを設計したアンウィンは、ハワードの思想を独自に解釈し、中世イギリスの町や村、建築で表現した。これはある意味で、最も忠実にハワードの思想を表現したものであり、人々を惹きつけたが、一方で、中世のデザインによって表現された、ゆったりとした、快適な住環境のみに目が行ってしまい、田園都市の本質を誤解させてしまう結果となってしまった。

このように田園都市が高い評価を受ける理由の一つに、実現したことがあげられるが、一方で、それがハワードの田園都市思想をゆがめ、郊外住宅地での活用という結果となっていったのである。

遅れながら、日本でも同様の都市の過密化による都市問題が起こり、その解決案として、田園都市に注目が浴びた。ちなみに、「田園都市」とは〈Garden City〉の訳であり、他にも「庭園都市」や「花園都市」などいろいろと訳されたが、結果的に「田園都市」に落ち着いたのである。しかし、この訳が本来の思想への誤解を生んだのかもしれない。

さて、戦争の勝利と産業の近代化によって、都市への人口流入による都市問題に頭を悩ませていた日本でも、ちょうど郊外に注目が浴び、富裕層などが都会の過密から逃れ、郊外へと住まいを求めはじめたために、スプロール化が起きていた。

また、市域を広げることで都市の密集を緩和しようという大東京市の構想も生まれ、事実、隣接する5郡82町村を巻き込み、昭和7年に市域拡大が実現している。

そうした社会背景の中、明治40年（1907）に内務省地方居有志の編集により、『田園都市』が出版され、日本に広く伝わることとなる。しかし、この『田園都市』はハワードの記したものではなく、欧米各国の様々な事例を集め、紹介したものであった。また、その後も建築雑誌等で取り上げられるが、そちらもレッチワ

ース等の事例の紹介が多く、ハワードの思想の本質は伝わらなかったのである。そして、やはり日本でも田園都市は郊外住宅地として認識されていったのである。それが如実にうかがえるのが、田園調布に代表されるような郊外住宅地である。田園調布は、渋沢栄一等が設立した田園都市株式会社によって計画・建設された街であり、他に洗足にもつくられている。会社名からも、街の名前からも、田園都市思想に影響を受けていることは明白である。

このように、日本でもハワードが提唱した田園都市の本質は伝わらず、郊外の理想的な住宅地として、田園都市は伝わったのである。



図 2-9 理想的住宅地案内

新都市への影響

こうして、事例とともに日本でも田園都市が広がるなか、田中自身も、言及はしていないものの、知識人として田園都市の存在は知っていたであろうし、計画に類似点も多いことから田園都市に影響を受けたことが推測される。むしろ言うなれば、海上新都市はハワードの田園都市の本質にもっとも忠実であったと言えるのではないだろうか。

例えば、中心性をもたせた街区構成であり、その中心に公園と公共施設を配置する点や、新都市内の動力を電化にし、きれいな都市をつくる点があげられる。しかし、何と言っても、ハワードの田園都市の本質である「自立都市」と「旧都市との関係」が、田中の構想にもみられることである。

「自立都市」という点では、この海上新都市は、商業の中心地として計画されているが、同時に住居も計画されており、海上新都市内で働き、住むことができるのである。つまり、この都市内で完結して生活ができるのである。

そして、「旧都市との関係」では、『東京新都市論』の結論に旧都市修正の利という項目があり、そこで、「…商業の中心地が此新市街へ移るのだから、殷賑の度合がまるで変って来る、馬車も荷車も大部分なくなる、往来がいくらか閑静になる、商店も小売店のみになって到る処夜見勢気分になるから、あとの東京は静かなのびやかなきれいに賑やかなものに変化する、…」と述べていることから、海上新都市をつくって終わりではなく、その先の、旧都市の改善をも視野に入れて、東京全体の向上を図ろうとしているのである。

つまり、多くの類似点から、ハワードの田園都市思想に影響を受けていたことは確かであり、郊外か海かという違いはあるものの、ハワードの田園都市思想同様、新都市を建造することで、旧都市の改善を構想していたのである。

4. 国際商業都市東京への夢

田園都市思想の影響を受け、新都市を構想した田中。では、なぜ郊外ではなく、海であったのだろうか。計画案の中には、「…何よりも交通運搬に便利を占めようといふ實業本意の設計と、成たけ塵埃の—それで懲りたから—ない處といふ衛生的意匠から來たる立案であるから、どうしても「海」へ着眼しないわけには行かない、…」と陸運による害に懲りた田中は、水運による交通運搬の経済性と衛生面に目をつけたこと、また、「單に擴げるといふだけでは、事業の整理や進歩に掛け構ひのない、人口本位の考案であるが、そのみで言へば、單に擴げただけでは、すぐに又擴げ又擴げしていかなばならぬ、……徒らに面積を擴大することは、交通上不便不利を滋くすることになって、事業第一といふ見地から考へると進歩的でない、……乃で私の考は、郊外へ擴げずに「海」へと見當をけた。」と郊外へ広げても、陸運問題の解決にはなっておらず、また一度広げると、どんどん広がるという危険性も危惧して「海」に計画したと理由を述べている。

しかし、果たしてそれだけであろうか。やはり、そこには郊外ではなく「海」へつくった「意図」が隠されているように思う。そこで、田中の新都市を海へと導いた背景を探ってみたい。

埋立地とユートピア

東京は埋立ての歴史である。

徳川家康が江戸に入府したのが1590年であるが、当時の江戸は、ほとんどが海であった。その後、日比谷入江や江戸前島を埋立て、都市江戸が出来上がった。その後も都市の発展とともに海は埋め立てられ、東京は拡大していくのである。

一方で裏を返せば、埋立地は、東京の抱える問題の解決の場でもあったと言える。例えば、月島や芝浦は、港湾機能が弱かった東京において、機能強化による経済発展のために行われた隅田川口改良工事によってできた埋立地であり、大正頃には、近代産業の受け皿として工場集積地となり、東京の発展に貢献した。



図 2-10 徳川入城時の海岸線（現代地図をベースに作図）

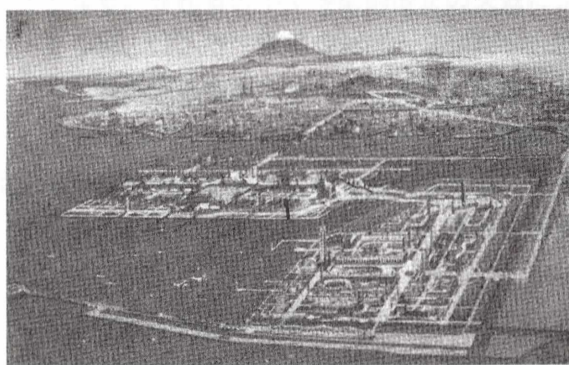


図 2-11 万国博覧会会場構想

また、戦後の住宅難では、晴海や豊洲に公団団地がつくられ、近年のウォーターフロント開発もその延長線上と言えるであろう。

そして、そのような意味をもっているためか、埋立地にはしばしば、夢が描かれることが多かった。近年のメタボリズムの構想や横浜のみなとみらい21の新都市は記憶に新しいが、それ以前にも、月島に新市庁舎の建設や万国博覧会の敷地利用などの構想があった。

つまり、埋立地とはいわば、白いキャンパスのようなものであり、その上には理想の施設や機能、空間は描きやすいのである。では、田中が描いた夢とはなんであったのか。

商都東京

タイトルの副題にも「新らしく東京灣に築成すべき模範的市街としての商業中心地…」とあるように、田中が白いキャンパスの上に描いた夢は、商業の中心地をつくりだすことであった。そして、それは長年埋もれていた、東京のあるべき姿を蘇らせることでもあった。

東京を商業の中心地へという商都の発想は、元をたどると、市区改正にまでさかのぼる。市区改正とは、明治22年から大正の頭まで、およそ30年かけて行われた、日本最初の大規模な都市計画である。そして、

この市区改正が行われるまでの長いやり取りの中で、商都東京は描かれたのである。なお、市区改正の詳しい背景は、藤森照信の『明治の東京計画』に任せるとして、ここでは、どのように商都東京が描かれ、そして消えていったかにだけ言及していきたい。

市区改正は、明治13年に当時の東京府知事であった松田道之による『東京中央市区画定之問題』に端を発すると言われる。この『東京中央市区画定之問題』で松田は、道路、運河、上下水道の改良など、都市計画として考えられるほとんどのことに触れていた。その中でも特に二つの事柄がメインに取り上げられている。

一つ目は中央市区画定という名の通り、改良の対象地を限定するための線引きを行うというものである。松田は対象地を下町の商業地帯を中心に囲い込む線引きを行い、商業繁栄のための改良を提案した。

二つ目は築港である。これは、先の囲い込みだけでは、いずれ衰退してしまうと危惧した松田は、さらなる繁栄を目指すためには、港を横浜から東京に移すことを提案し、東京を国際商業都市にする構想を語った。

一方は閉じ、一方は開くという一見矛盾する構想には、築港の考えが外部からの輸入であったという背景があるものの、松田が描いた東京の未来は共に、商都東京であることが分かり、ここに、商都東京の構想が生まれたのである。

その後、東京府庁内の市区取調委員による審議の中で、一つ目の中央市区画定は、市区全体の改良が必

要という意見が多数を占めたことより消え、築港優先で市区の改良を行う方向へと話が進むこととなったが、松田の急逝により、何も進展がないまま、ひと段落をむかえる。

引き続き、後任の芳川顕正によって、東京の改良は受け継がれていくのだが、ここで方向転換をする。芳川によって出された『市区改正意見書』には、築港優先で進められるはずの計画案から、築港が消え、道路や運河の改良や施設配置などに主軸が移り、その中でも「道と運河と鉄道については目隠ししてでも歩けるくらいに事細かな案内がつく…」と藤森照信が述べるように、交通計画に重点が置かれている。

松田の計画案が、商業発展による東京の繁栄なのに対し、芳川は交通整備によって、封建都市江戸を解体し、東京を国土全体の交通網の収束地点とする、一国の首都、言い換えるならば帝都東京を目指していたのである。

その後、芳川の場合は内務省に上申され、内務省内に市区改正審査会が設けられ、審議が行われた。しかし、帝都よりではじまった審査会は、審査会の一員であった渋沢栄一の手によって、芳川の場合はことごとく覆され、再び築港計画から成る商都東京構想が浮上してきたのである。そして、審議を重ねるうちに計画案は商都よりへと変わり、太政官へと上申されることとなった。

ところが、このまま順調に進むと思われた、商都東京の夢は、外務省によって、2年間の沈黙を強いられることとなる。外務省の不平等条約改正の失敗によって、再び日の目を見ることとなった計画案は内閣の閣議にかけられ、ここです承を得れば、元老院へと渡り、実現へと向かうのであったが、そこで、横浜勢の反対により、築港計画は却下されてしまう。築港とともにあった商都東京の夢はついにここで潰えてしまう。

その後、再び練り直された計画案は、内閣の了承を得て元老院へと渡る。ここで元老院の反論にあうが、決定権がないことから、これを強行突破し、法令発布へとこぎつけたのである。ついに市区改正が実現へと一歩踏み出したのである。こうして、最終審議を経て、明治22年、市区改正は行われることとなった。

このように、明治の初めに、江戸を解体し、東京を作り上げていくうえで、東京の未来図として商都東京は描かれてきたのである。このとき、商都東京を実現するためには、東京湾に国際貿易港をつくるのが欠かせないものであった。つまり、築港抜きにして商都東京は成し遂げられないのであり、ここに商都と築港は密接に結びつくのである。

そして、時代は大正へと移る。近代国家として都市化する東京は、人口の爆発的増加によって、否が応にも商業は活発化し、経済による発展を遂げた。明治の初めは80万人ほどであった東京の人口は、大正9年には200万人を超え、そのために資本が東京に集中し、流出入する貨物量は1200万トンを超えたのである。

明治の初めにこれを予測できなかったことは仕方のないことではあるが、東京における商業の重要性は日に日に高まっていた。そうした中、築港の機運も高まりを見せ、大正9年には「東京築港計画書」が立案されたのである。ここに、築港に釣り上げられるかのように、再び商都東京という未来図が浮上してくる。

つまり、新都市を海につくるという構想は、田中自身も「…それに百貨の衆散といふ点からしても、近く実現されべき筈の「東京湾築港」をも一層有意義にするためにもである。」と海上につくる理由のひとつに築港との関係性を述べているように、水運の利便性や衛生面、また都市のスプロール化という現実的な理由とは別に、築港と結びつけ東京を国際商業都市に発展させるという未来図を構想していたからである。

4. 結び ～新都市のアイデア～

近代化によるゆがみは、明治後期から徐々に始まり、この頃には、まさに飽和状態であった。そうしたゆがみは、交通の問題や物価の高騰という形で人々の生活にまで表れはじめたのである。そんな中、一宗教家であった田中は、この問題に対して筆をとった。

それは、陸運の弊害から水運に活路を見出し、ハワードの田園都市思想に倣い、新都市という新たな受け皿をつくることで、既存の都市の改善を図った。

また、そのうえで、ハワードのように、郊外につくるのではなく、埋立といういわば東京の伝統的な開発手法を用いて、水運の利便性を高めると同時に、築港との結びつきを強化して、国際商業都市東京というさらなる発展を構想した。

つまり、田中は、都市東京に対して、近代化による弊害や閉塞感を感じつつも、一方で日本の首都として、東京の近代化の必然性も感じていたといえる。そのために、新都市という近代化を受け入れるための新たな受け皿を用意し、そこに、近代化による都市東京のさらなる発展を託したのであった。

3章 健全な社会へ

1. 吉井俊太郎 労働者への娯楽

大正 12 年（1923）9 月 1 日、関東全域を大地震が襲う。世にいう関東大震災である。死者・行方不明者は 10 万人を超え、辺り一面は瓦礫の山と化した。当然、首都東京も壊滅的な被害を受けるのだが、一方で、震災復興は都市改造のまたとないチャンスでもあり、都市や建築の在り方が見直される転機でもあった。そんな中、震災から 2 年後の大正 14 年、吉井俊太郎は、雑誌『建築画報』にて時代を象徴するかのような 2 つの計画案を載せる。



図 3-1 吉井俊太郎（重見氏筆）

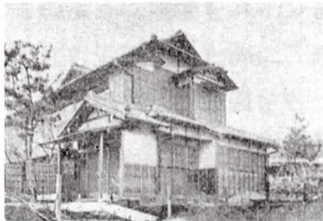


図 3-2 有賀氏別邸



図 3-3 勝田屋商店（左）

森永製菓第二販売店（右）

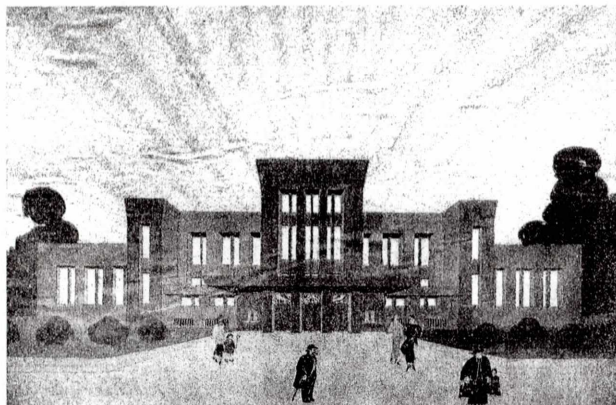


図 3-4 貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場

吉井俊太郎については、残念ながら著者の力不足のため、詳しい経歴を見つけることはできなかった。しかし、雑誌に寄せられたものから推測すると、吉井は早稲田大学で建築を学び、大正 12 年の時はまだ学生であった。卒業後は、設計事務所を開設し、熱海で有賀氏別邸の設計や、勝田屋商店や森永製品第二販売店の設計、また、震災で生き残った銀座煉瓦街の店舗のリノベーションもしており、建築家として、幅広く活躍していたようである。

さて、大正 14 年に『建築画報』に寄せられた計画案は、元々、早稲田の建築作品展覧会に出品されたものであり、それを何点か雑誌に掲載したようである。そのことが、掲載された月の編集だよりに書かれており、他にも「大震災記念館」（八尾良三）や「外濠に建つ或る倶楽部」（佐藤良清）、「傾斜地に建つ住居群」（馬場乙夫）などがともに寄せられている。

そうした中、吉井は 2 つもの計画案を載せる。1 つは「一千人キネマ・ハウス」であり、もう 1 つが「貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場」である。2 つとも、労働者を相手に、彼らのための娯楽施設（一方は映画館で、もう一方は公設浴場）を計画したものであった。

2. 貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場

展覧会の中で、労働者と娯楽施設というテーマを掲げて、2 つもの案を構想した吉井。今回は、2 つのうちの 1 つである「貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場」から読み解いていきたい。

雑誌に寄せた計画案の記述を見ると、「一日の汗、の労働の跡汚ない仕事の跡、其等を洗ひ落し又次の日のパンの資料となる精力を養ふのは湯だ。」と 1 日の労働の汚れと疲れをとり、明日への鋭気を養うために必要なのは浴場だと述べる。そのうえで、「や

つぱり労働者には廣々とした浴槽にひたつて不潔な上り湯でなくシャワーバスを浴びて、衣服を着てからも、煙草を薫らし乍らおしやべりでもしたい。…少しも面白くない湯屋で身も心も其の疲れが癒るものか。」と機能面だけでなく、精神面も考慮し心身ともにリフレッシュを目的とした公設浴場兼娛樂場を構想している。

その際に、参考にしているのが、「…江戸時代の風呂、其淫蕩的な事を楽しむのではないが。あの風呂屋の二階の氣分が一其時分の床屋と同じである—全く民衆娛樂場である。あれを浴場に復活したいのだ。」と江戸時代の風呂屋や床屋であり、そのような雰囲気再現しようとしている。そして、このような建築を貧民窟の中央に計画したのである。

計画案の後半部には建築についての説明がある。地下室に下足場を設け、ホールで鍵を受取り、脱衣所を通して浴場へ行く。プールへ行く際も脱衣所を通らなければならないようになっており、観覧席へいきたい場合は正面ホールの階段下か踊場から直接入れる。2階は娛樂場としての機能が当てられている。本など読み物をする部屋と将棋や碁、トランプなどが出来る部屋の2室を設け、おしやべりをしたい者はホールでするようにしている。3階には室内運動場を設け、時には講演会にも用いられるようにしている。そして最後に屋上庭園があり、お月見でもするのに良い場所であると締めくくっている。

このように浴場をメインとするも、プールや遊び場、室内運動場と様々な娛樂場のある複合施設を、貧民窟に住む労働者のために、心身ともにリフレッシュができる、そんな空間を計画しているのが、そこには、どのような意図をもって、この構想の計画を描いたのであろうか。

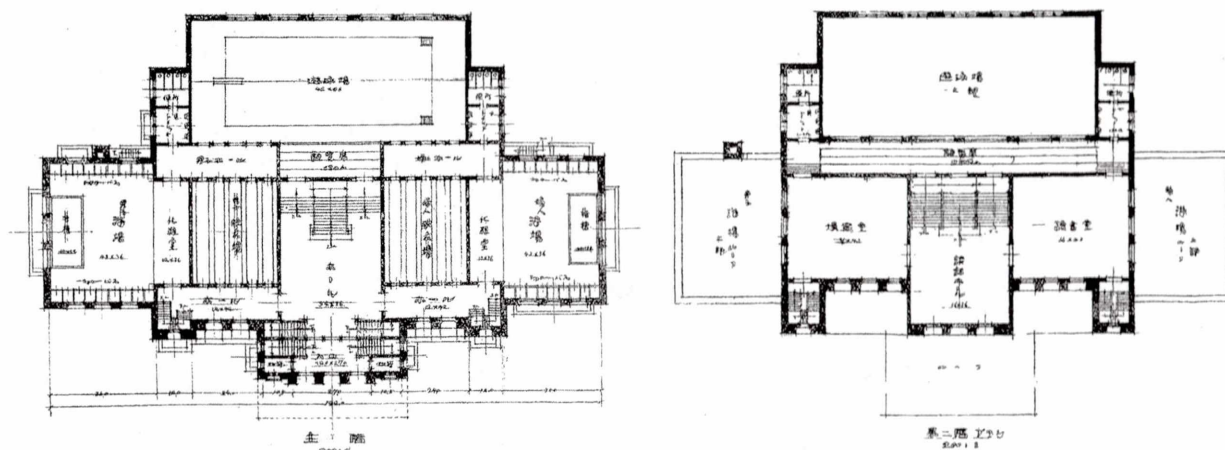


図 3-5 貧民窟に建つ公設浴場兼娛樂場 平面図(左:1, 右:2階)

3. 民衆娛樂場

貧民窟の中央に浴場と娛樂場を計画した吉井であるが、空間の参考として江戸時代の風呂屋や床屋を用いているのは面白い。「…江戸時代の風呂、其淫蕩的な事を楽しむのではないが。あの風呂屋の二階の氣分が一其時分の床屋と同じである—全く民衆娛樂場である。あれを浴場に復活したいのだ。」とあるように、江戸時代の風呂屋の2階や床屋が民衆娛樂場であったことは推測出来るが、果たしてどのような空間であったのだろうか。

風呂屋二階

風呂屋、湯屋、銭湯といくつか言葉があり、主に、関西の方では風呂屋と呼び、江戸では湯屋と呼ばれていたようである。しかし、皆料金をとって入浴させる営業のことであることに変わりはない。そのためここでは基本的に、吉井に倣って、江戸時代のものを「風呂屋」と表記し、明治以降のものは「銭湯」と表記していきたい。なお、引用等でこれらの言語が混同することがあると思われるが、そこはご了承いただきたい。

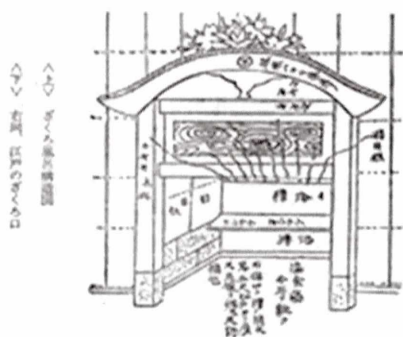


図 3-6 石榴風呂



図 3-7 改良風呂

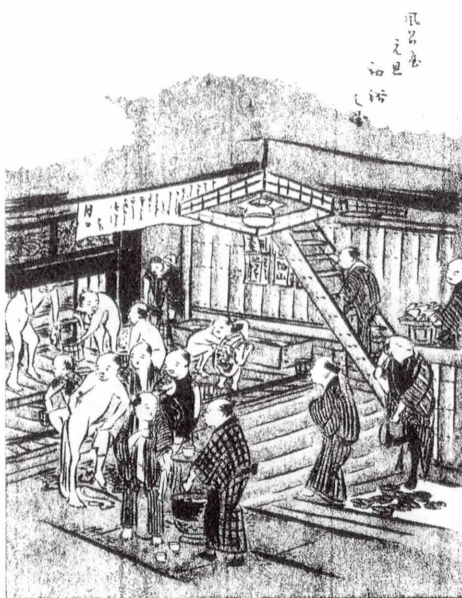


図 3-8 風呂屋の二階への階段

さて、銭湯の歴史は意外と古く、鎌倉時代にはあったようである。しかし、江戸に銭湯が出現したのはもっと後の天正十九年（1591）のことであった。当時の銭湯は、現在我々が利用するものとは異なり、湯ははっておらず、蒸し風呂が主流であった。その後徐々に変化していき、石榴風呂と呼ばれるスタイルが主流となっていた。室内には湯がはってあり浸かることもできたようであるが、湯気のため薄暗く、湯の清濁もわからなかった。

明治に入り、しばらくは江戸時代を引き継いでいたが、明治10年ごろに改良風呂と呼ばれる風呂が出現。高い天井と湯気抜き窓が設けられ、明るく、解放的になったのである。そして、大正10年頃にタイルが貼られだし、昭和2年頃カランと呼ばれる蛇口が設けられ、現在我々が利用する銭湯のスタイルが確立したのである。

このような変遷のなか、風呂屋の二階がいつからということとは定かではないが、寛永2年（1749）の『武玉川』に「湯屋の二階は武士の物」という記述があり、この頃にはあったものと推測される。しかし、当時は民衆のための空間ではなく武士という限られた人のための場であったようである。

その後、民衆に開かれ、娯楽場として使われていった。江戸後期頃に書かれたとされる『江戸府内風俗絵本往来』には風呂屋の二階のことが事細かに描かれており、当時の様子がうかがえる。

風呂屋の二階への階段は男湯女湯の境にあり、男湯からのみ上れるようになっていたようである。二階はかなり広く、「恰も酒樓が妓樓に彷彿たり…」と言わせるほどであった。階段を上ると正面に客用の下足段が設けられているおり、一階の階段下にも下足段はあるものの二階を利用する客は下駄をもって二階へと上っていった。二階にも番頭があり、番頭台には茶釜や火炉といった茶道具やその隣に菓子箱が置いてあった。女中を置いている風呂屋もあったが、それは山の手



図 3-9 明治 14・15 年頃の湯屋の二階



図 3-10 風呂屋二階の様子



図 3-11 町家スタイル

の方であり、下町には居なかったようである。(図 3-9) は明治初年の頃の湯屋二階の様子であるが、これは一流と呼ばれるような風呂屋であったと言われており、実際多くは、(図 3-10) の様なものであったそうである。

そして、風呂屋の二階の様子を次のように語る。「…寄席の噺芝居相撲の評判より前夜の火事遊藝の師匠の噂等は絶間なく圍碁將碁の下手連中あり口輕の舌戦あり朝湯に入らんとし終に午飯の迎ひをうけ初めて驚きて歸宅するなど日々のことなり…」と、将棋や囲碁が置いてあり、茶や菓子を食べながら、芝居や相撲、噂話などで時間を忘れるほど盛り上がるなど、まさに憩いの場であったことがうかがえる。また「…湯屋は總て近邊壹丁半四方位ゐの人のみ入來れるより香水行の主人は朝湯夕湯の客の身分を知る故に邂逅新顔の客來るや其注目すること頻りなる…」とあるように、それぞれに行きつけの風呂屋があり、地域に根差した社交の場でもあったことがわかる。

このような空間は明治に入ってもあり、明治初年が最も繁盛していたようである。このことから時代が明治に代わっても、人々の生活はすぐには変わらなかったことがうかがえる。

しかし、繁盛していた風呂屋の二階も明治 15 年頃にはほとんど姿を消したようである。消滅理由は定かではないが、明治 10 年頃の改良風呂の出現と流行により、天井が高くするために、二階をなくすという建築的理由と明治 12 年に湯屋取締規則が公布され、直接二階が禁止されたわけではないが、風紀のために浴場内部が見えないよう浴室と二階に暖簾などの目隠しを取り付けるといった条例が出されたことが原因にあるのではないかと推測する。

このようにして、このように二階は姿を消したのである。しかし、現存する昔の銭湯建築を見ると、実際には二階がないにもかかわらず、あるような外観をしているのは、当時の名残なのかもしれない。

ここで、デザインの話が出たので、少し触れてみたい。吉井が構想した公設浴場のデザインは RC の質素なものであった。銭湯というと、社寺建築のような外観が特徴的だが、これは関東大震災以降からであり、関東特有のものであるらしい。元々は、町屋スタイルが一般的であり、一目で銭湯とはわからない外観であった。しかし関東大震災を機に、社寺建築の



図 3-12 社寺建築



図 3-13, 14 洋風の銭湯(左) RCの銭湯(右)

スタイルが流行する。一説には、銭湯が社寺の慈善事業から発生したという背景が影響しており、震災という惨事に救いを求めたのではないかとある。しかし、全国を見れば、洋風のものから RC のものまでと、様々であり、もちろん東京にも RC の銭湯は存在していた。

そんな中、吉井は『帝都に於ける地震前後の建築について』で「…如何なる犠牲を拂つても私達は耐震耐火の家を造つて、自己の財産と生命を安全に守らねばならない。…」と述べるように、大地震と大火事が起きた後では、合理的に考えれば、耐震耐火の RC が用いられるのは当然である。また、『建築画報 - 住宅の表現 - 』で「住宅は一時的なものでない。又別荘と異り常住の場所なれば、装飾其他すべてに於いて、平凡でなければならぬ。平凡なものは永久に倦嫌を感じない。」と、日々の生活とともにあるものは、平凡なデザインでなければならないと述べるように、あえて質素にすることで、市民に受け入れやすく、色あせないものをつくろうとしていたのではないか。

少し話しがそれてしまったが、つまり風呂屋の二階とは、将棋や談話などを行う空間であり、民衆にとって日々の憩いの場であると同時に、地域密着の社交場であったのである。

また、ここで面白いのは、風呂屋と娯楽とは日本において、常にセットであったことである。江戸時代の風呂屋が民衆娯楽地であったことはすでに述べているが、その後も、大阪では潮湯がテーマパークとして人気を集め、東京でも、京王閣の遊園地内に浴場がつくられていることからうかがえる。日本人にとって、風呂とはいつの時代も民衆娯楽であったのだ。

では、床屋はどうであったのだろうか。

床屋

床屋も風呂屋と同様に、地域密着の社交場であり娯楽場であった。

江戸前期までは、専門職としての営業はなく、五人組と呼ばれるに組織内で、鬘水入れと櫛をまわして使っていたようである。その後、露店で結髪業が行われ、寛永 17 年 (1640) には鑑札制となり、髪結床として次第に広まり、幕末には 2400 軒の髪結床があったそうである。当時の様子を、『江戸府内風俗絵本往来』では「…客人多人數待合する時は将基の始まることあり談話は流行物の噂より戯言舌戦扱は色里の嘶近邊女子の噂等時刻の移るを覺へず一の慰場は乃ち髪結床なり…」と民衆の憩いの場であったことを記述し、また『光雲懷

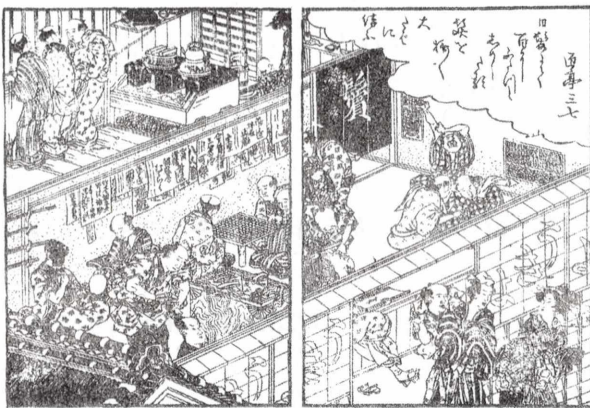


図 3-15 社交場かつ娯楽場として利用されていた床屋

古談』によると「次の町内のものが飛び込むと、變な顔をしてことわったりしたものです。一町内の寄合所なり遊び場でありました。…」と地域に根差した社交場であったと述べる。このように、床屋も風呂屋の二階同様に地域密着の社交場と娯楽場であったことがうかがえる。

つまり、吉井が復元したかった江戸時代の風呂屋二階と床屋とは、談話をするなどの地域密着の社交場であり娯楽場としての空間であったのである。

4. 都市下層民の善良化

公設浴場に、地域密着の社交場と娯楽場を提供しようとした吉井。では、なぜそれを貧民窟につくろうとしたのか。



図 3-16 鯉河橋貧家の夕（明治 36 年）

貧民窟またはスラムといえば、人口の過密が引き起こした世界共通の問題であり、いわば都市であるがゆえの問題である。恐らく様々な解釈とともに貧民窟という言葉が使われていると考えられるが、『東京百年史』によると、貧民窟とは「収入の不安定な下層民が集団居住する不良住宅の密集地域」と書かれている。ここでは、これを一般的な定義として話を進めていきたい。明治期には三大貧民窟と呼ばれる地域が存在し、また、大正に入り都市としてみずみずしく発展する中であっても、貧民問題は陰のように付きまとい、頭を悩ませていた。大正時代に流行った『東京節』の一節には貧民窟の様子が次のよう描かれている。

「東京にも裏には裏がある 鳥も通はぬ島といふが おてんとさまも影見せぬ 暗くて臭くて穴のような
犬の小屋かと思ったら どういたしまして人間が 住んでをります生きてます 衛生論も体面論もパイノ
パイノパイ パリコトパナナデ フライフライフライ」

陽気なメロディーに乗せて歌われているが、実際はかなりひどい様子であり、不衛生な環境の中、ボロボロの長屋に住み、その日の飢えを凌ぐので精一杯であった。

ここで、吉井が都会について語った記述をみてもらいたい。

「都會・・・それは不自然と雜然騒然とより外に何物もない。

電車の走る音、自動車の警笛、建築場のリベットイングの響き、赤い青い廣告、白い建物、それ等が混同して吹き立つ砂塵と共に、物質生活の現實の悲哀を叫んでいる。この惱ましい悲鳴が都會生活者神經質の頭

を刺激し攪亂して、一層神経をいらただせる。

今この稿を書いている場所は下谷の裏街である。裏の鍛冶屋のハンマーの響き、惱ましいモーターの呻き、職工の俗謡を歌ふ聲、安い蓄音機のキーン、聲、近所の娘の引く下手な三味線、飴やの太鼓、子供の騒ぐ聲、こんな物がシツキリなしに聞へる。頭が混亂して到底一日中家には居られない。是等が都會の昼の印象であり、悩みである。」 『不自然より自然の開拓へ』

都会についての印象が語られており、また吉井自身も下谷に住んでいたことがうかがえる記述である。しかし、ここでひとつの疑問が浮かぶ。計画文やスケッチから感じる印象と吉井の思う都会の印象。そして実際の貧民窟の様子とでは少し異なるように感じる。例えば、『東京節』の歌詞に東京の‘裏’という言葉が使われており、吉井の都会についての記述にも下谷の裏街という‘裏’という言葉が使われている。下谷と言えば、かつて3大貧民窟と呼ばれた、下谷万年町がある区であり、吉井の言う‘裏’がそこを指しているのかは定かではないが、同じ東京の‘裏’でも表現している空間の雰囲気異なる。また、スケッチを見るとそこに描かれている人は、きれいな服に身を包んでおり、真ん中にいる紳士は、どう見ても富裕層に見える。貧民窟の中央で、その日を生きるのにやっとな人々がこのような恰好をしているはずがない。

つまり、いわゆる貧民窟と呼ばれるものと、吉井の言う貧民窟とは、イメージしている空間や対象者が違うのではないだろうか。

そこで、中川清の『日本の都市下層』を参照に、当時（大正14年頃）の貧民窟の実情をみていき、吉井の言う貧民窟がどのような空間であり、社会であったのか。またそのうえで、どのような人々を対象にこの計画案を構想したのか、とらえていきたい。

集住の解体と地帯として地域化

中川清は『日本の都市下層』で、都市下層を他と区別される固有の「下層社会」としてではなく、都市における下層10%としてとらえ、各時期の都市下層の生活を把握しようと試みている。そのことを踏まえ、分析を見ていこう。

まず、調査手法の変遷である。明治初期、貧民窟は異質な空間として捉えられており、朝日新聞の『府下貧民の真況』にみられるように、新聞記者などの民間の個人が見聞にもとづく印象判断で場所を選定し、踏査というスタイルで貧民窟を調査し、描いてきた。

しかし、明治末になると内務省による細民調査が行われ始める。この調査では、特定の集住地域において、対象を明確にして行われた。その規定は地域、職業、住居、収入の4つからなっている。この調査で見えてくることは、国が調査を行ったこと。つまり、都市下層民を国家の成員としてとらえ始め、政策のために行われたことが言える。また、このころから、所帯として都市下層民が把握できるようになったことが言える。しかし、『細民調査統計表（明治44年調査）』と『細民調査統計表（大正10年調査）』とでは、調査市域内における対象の割合は、前者が10%以上なのに対し、後者は3.4%とかなり減少している。その理由に、中川清は世帯が独立し始めたことによる集住世帯の減少を挙げている。

震災後になると、内務省から地方行政へと調査主体が移り、方法も二分された。一つ目が不良住宅地区調査であり、新市域を含む東京市全体に調査地域が広がり、その中で住環境及び約20戸以上の集団地を規定として集計するものであった。つまり、集合した不良住宅に特化した調査であった。この調査の背景には後の不良住宅地区改良法が関係している。

二つ目が要保護世帯調査であり、調査範囲は不良住宅地区調査と同じく新市域を含む東京市全体であるが、

対象は、方面委員による方面カードと呼ばれる生活基準をもとに一種、二種と格付けをしたものを基準に集計された。こちらは、生活基準、つまり収入や家賃などに特化した調査である。

そして、この二つの調査によって捉えた対象の割合は、前者が約1%に対し後者は約10%であった。また、東京の新旧両地域を調査した『東京市新市域不良住宅地区調査（昭和9年調査）』によると、「…家屋は密集することを条件とした。従って不良住宅が散在的な地域は相当見受けられたが、これは調査外とした。」とあるように、都市下層民が集住規定では捉えきれなくなったと同時に、下層民が貧民地域から分散したことを意味する。

では、なぜ集住せずに、分散できたのか。その背景には、世帯の安定と独立がある。明治末から、都市下層民を世帯でとらえられるようになったことは先に述べたが、明治初期から中期頃までは、一室に複数の人が住んでおり、世帯としての把握が困難であった。それが明治終わり頃になると同居世帯は減少し、世帯として把握できるようになった。これは、彼らが、独立し始め、同居の必要性がなくなってきたことを示す。また、妻の有業率をみると明治期から大正初頭までは7~8割だったのが、大正中期には5割以下に減り、大正末から昭和にかけては2.5割と減少。子供の有業率はもっと顕著で明治中期には5割ほどいたのが、明治末から大正にかけては1.5割ほどに減少している。これと反比例して就学率は明治中期にはほとんどいなかったのが、明治末には約7割となりその後増え続けてきた。このことから、世帯主の収入が安定してきたことで、妻は働かずにすみ、子ども働かずに学校へ通えるという、生活レベルの向上が見て取れる。

このように、世帯が安定し独立していくことで、『東京百年史』による貧民窟「収入の不安定な下層民が集団居住する不良住宅の密集地域」という定義の中で「集団居住する不良住宅の密集地域」が当てはまらなくなってきたのである。

では、彼らはどこへ行ったのか。彼らは、より安い場所を求めて分散したのである。しかし、そうそう安いところが点在しているわけもなく、彼らは、共同で住みはしないものの、都市下層民が多く集まる地帯として固まっていたのである。中川清の言葉を借りれば、「地帯として地域化」したのである。

このことを、下谷を例にもう少し見ていこう。



図3-17 細民地区の分布図

下谷を例に

下谷を選んだ理由には、まず、先の記述からもわかるように、吉井自身が下谷に住んでいたことがある。それを踏まえたうえで、都市下層民の動き、つまり、集住性が解体され独立するも、ある地域に集まり地帯化する動きがよくわかるからである。

まず、東京市役所による『特定区域に関する調査（大正14年調査）』に載せられていた細民地区の分布図を見ていただきたい。（図3-17）これは、東京市社会局における所謂細民階級（5人以上の家族1世帯を標準とし、月収額50円~60円以下）の居住する地域と東京市保健局において非衛生地とされる地域及び内務省社会局、警視庁における細民調査の標準を参考に区画を定め、更に実地踏査の結果、市内72町丁を特定区域としたものである。この図から下谷区、浅草区、本所区、深川区に集中し、その中でも、区の境や新旧の市の境に密集し

下谷区			
上野南大門町	上野三橋町	坂本裏町	龍泉寺町
御徒町一丁目	下谷町一丁目	入谷町	金杉上町
御徒町二丁目	下谷町二丁目	筆筈町	金杉下町
御徒町三丁目	池ノ端仲町	谷中天王寺町	三ノ輪町
仲御徒町一丁目	数寄屋町	谷中茶屋町	上根岸町
仲御徒町二丁目	上野広小路町	谷中町	中根岸町
仲御徒町三丁目	西町	谷中三崎町	下根岸町
仲御徒町四丁目	南稲荷町	谷中上三崎北町	同朋町
長者町一丁目	北稲荷町	谷中初音町一丁目	五條町
長者町二丁目	車坂町	谷中初音町二丁目	上野山下町
二長町	上車坂町	谷中初音町三丁目	
竹町	下車坂町	谷中初音町四丁目	
東黒門町	万年町一丁目	谷中真島町	
西黒門町	万年町二丁目	谷中坂町	
(上野)元黒門町	山伏町	谷中清水町	
北黒門町	豊住町	上野花園町	
(上野)北大門町	新坂本町	上野櫻木町	
坂町	坂本町一丁目	池ノ端七軒町	
練堀町	坂本町二丁目	茅町一丁目	
上野町一丁目	坂本町三丁目	茅町二丁目	
上野町二丁目	坂本町四丁目	谷中上三崎南町	

	特定区域(T14)
	不良住宅(S6)
	要保護(S8)
	特定区域+要保護

図 3-18 各調査地対応表（下谷区）

ていることが分かる。これを見るだけでも、中川清の言う「地帯として地域化」したことがうかがえる。

さて、次に表を見てもらいたい。(図 3-18) これは、『特定区域に関する調査（大正 14 年調査）』と『東京市不良住宅地区調査（昭和 6 年調査）』、そして『東京市要保護世帯調査（昭和 8 年調査）』で取り上げられた場所を下谷区の町丁に限定して重ねたものである。

前にも触れたが、「不良住宅調査」は住環境をもとに不良住宅が約 20 戸以上集団している場所を対象にしており、「要保護世帯調査」は方面カードと呼ばれる生活水準の階級わけをもとに、収入標準を定め、それに則って要保護世帯を集計したものである。(今回は『東京市要保護世帯調査（昭和 8 年調査）』で集計されたものの中から、100 世帯を超えるものだけを対象に重ね合わせた。) 表を見ると、『特定区域に関する調査（大正 14 年調査）』と『東京市要保護世帯調査（昭和 8 年調査）』は重なる場所が多いが、『東京市不良住宅地区調査（昭和 6 年調査）』だけはあぶれている。

これからわかることは 2 つある。まず、1 つ目は大正 14 年から昭和 8 年の間で大きな変化がないこと。これは、重なる場所が都市下層民の多くいる地帯として定着していることがわかる。

2 つ目は、都市下層民を集住性では捉えきれないことが明白となったことである。つまり、かつての貧民窟の定義である集住性の解体が、少なくとも下谷では言うことが出来るのである。そして、これが意味することは、中川清の言う「地帯として地域化」の証明とともに、吉井の言う貧民窟がいわゆる貧民窟（収入の不安定な下層民が集団居住する不良住宅の密集地域）とは異なっていることがわかる。

以上、明治から昭和初期の貧民窟もとより都市下層民の変遷を見てきた。このことから、吉井の言う貧民窟とは、かつての異質な空間ではなく、相対的に都市下層民が多くいる場としての位置付けであり、大河内一男が『日本の中産階級』で「戦前のサラリーマンの歴史をふり返ってみると、社会の「中間層」とか「中産階級」とか言うような呼び名をあたえるのは、どうもふさわしくない。むしろ洋服を着た、気の弱い、貧乏暮らしの「下層社会」だったと考えた方が実態に合っているようだ。」と指摘するように、地方出身者などの多様な人々に加え、上はサラリーマンから下は要救護者まで幅広い階層が個別に混在している地域であることが言える。

さて、吉井の言う貧民窟がどのような場を想定していたのかが分かったところで本題に戻ろう。なぜこのような場に、地域密着の娯楽場である公設浴場を計画したのであろうか。そして、この計画において、吉井は何を言いたかったのだろうか。

教化としての娯楽

まず、時代背景が大きく影響していることは間違いない。大正という民衆の時代にあつて、大正デモクラシーに始まり、米騒動、日比谷焼打ち事件など、各地で民衆騒擾が起こった。そして、この騒擾の主体が何を隠そう都市下層民であり、吉井がこの計画で対象にした人々である。そして、そんな騒擾の主体である都市下層民に「娯楽（場）」を提供するという行為が鍵を握る。つまり、「娯楽」には、人々を「教化」とするという役割を一部担ってきたからである。

娯楽といえば、飲食から、釣りやスポーツ、読書や美術鑑賞と様々であり、一概に一言では言い表せない幅の広い、そのうえ奥が深いものである。

そんな娯楽が研究や議論の場に現れたのは、ちょうど大正の中頃からであり、民衆芸術論や民衆文化論の延長線上で語られた。

議論の中では、論点は主に2つに分けられ、1つ目は、対象とする「民衆」がどのような人々を指すのかであった。一方は、労働者階級を主体とする都市下層民であり、他方は、ブルジョア階級を含む国民全般を指していた。そして2つ目は、「民衆のため」の芸術や娯楽なのか、それとも「民衆による」芸術や娯楽なのかという問題であった。

こうした議論の中で、娯楽を、「民衆を教化するための道具として利用する」という教化主義の考えがあり、それはつまり、民衆を「労働者階級を主体とする都市下層民」ととらえ、「民衆のため」という側の考えであった。

そうした考えの一人であった中田俊造は、「…老幼男女等複雑なる内容を有する社会教育に於て之等多数の人々の心を捕へるには娯楽の施設ほど有意義なものは他にない。」と、社会教育において娯楽の重要性を見出し、後に民衆娯楽を社会娯楽に置き換え、「社会生活の教化的再建を目標としてあく迄社会環境より、社会娯楽より、非教育的要素の害悪を除去する様に努めねばならない。」と、娯楽による民衆の教化を述べている。

このように、「娯楽」には、人々を「教化」とするという役割があつたのである。このことを踏まえて計画を見ると、吉井は貧民窟に地域密着の娯楽場である公設浴場を計画することで、体をきれいにし、精神の疲労回復を図ると同時に、都市下層民の善良化を図り、民衆騒擾の危険因子の排除を構想していたのである。

5. 結び ～健全な社会へ～

労働者と貧民窟という、まさに時代を反映する都市問題をテーマに、早稲田の建築展覧会に作品を発表した吉井。しかし吉井の構想した場所は、かつての貧民窟と呼ばれるような異質な空間ではなく、相対的に都市下層民が多くいる場であり、多様な人々（地方出身者など）や階層が個別に混在している地域であった。そして、そこに住む労働者のために、公設浴場を、しかも、風呂屋の二階という江戸時代の娯楽空間を引っ張り出し、地域密着の社交場と娯楽場を提供するというものであった。

そこには、個別に分散し、地域に吸収されたことで、外見上の実態把握が困難になってしまったことという、時代によって変化した貧民の問題に対して、公設浴場兼娯楽場という都市施設をつくることで彼らの避難場所をつくと同時に、娯楽による都市下層民の教化が意図されていた。

つまり、労働者や貧民という都市問題に対して、スラムクリアランスという地域開発による改善ではなく、現状を考慮して、建築単体による改善を構想したのであった。

ところで、このような施設は、別の形で実現していた。それは東京市によって昭和3年に完成した「小石川隣保館」に同じような施設を見ることが出来る。小石川隣保館は、鉄筋コンクリート3階建てで、1階には事務所や集会所、講堂があり、2階には教室や図書館があり、3階には室内体育館や倶楽部室がある。そして、地下に理髪室や浴室が付設されている。そして、この隣保館の意図は生活困窮者の保護教化であった。

まさに吉井が構想したものと類似している。この隣保館のような施設は、古くは明治末からあり、大正から昭和初期にかけて多く開設されている。つまり、これを知っていたうえで計画したのか、はたまた、知らずに計画したのかどうか定かではないが、この吉井の構想とは、時代の必然性から生まれたものであり、最も時代に適していた構想であったことがうかがえる。

さて、以上より、このような構想なかで、吉井は、都市東京の主体を都市下層民ととらえ、都市とは、吉井のいうような貧民窟ととらえていた。そのうえで、その都市の未来を、都市改造や都市の発展に求めるのではなく、民衆、言い換えるならば都市下層民の生活を向上させることで、都市東京の改善という未来を描いた。つまりは、民衆の改善による社会の底上げによる、健全な社会を構想していたのである。

4章 モダニズムの可能性

1. 川喜田煉七郎 建築界の異端児

1926年12月、わずか15年という短い期間でありながら、大正という激動の時代が終わり、昭和という新しい時代が幕を開けた。

その2年後の昭和3年(1928)、大正時代に新風を巻き起こし、若手建築界を牽引してきた分離派建築会の第七回展が、日本橋の三越で行われた。そして、事実上これが最後の展覧会であった。そこで、分離派客員であった川喜田煉七郎が「浅草改造案」を展示し、人々の目を惹き付けた。

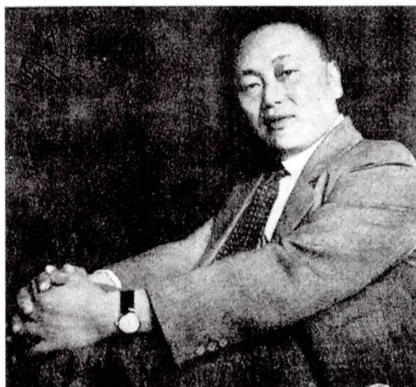


図4-1 川喜田煉七郎

川喜田煉七郎は明治35年(1902)日本橋の米問屋の子として生まれ、中学時代を浅草で過ごす。その後、東京工業大学の前身である蔵前工業高等学校の建築科に入学。学生時代は山田耕柝と交流をもち、作曲に励む。卒業後は、フランク・ロイド・ライトのもとでアルバイトをし、遠藤新の設計事務所に勤務するなど建築に従事していた。そして昭和2年、分離派第六回展に自身の卒業設計を応募。見事入選し、分離派客員となり、翌年の七回展で浅草改造案を出す。同じ年にはAS会(明日の建築を考える会)を結成する。

そして昭和5年、ウクライナのハリコフ劇場建築国際設計競技において、グロピウスなどの名だたる建築家を抑え、4位に入選し一躍時の人となった。その後、月刊雑誌『建築工芸アイシーオール』の創刊や、新興建築家聯盟に参加するなど精力的に活動するも、これ以降建築界から姿を消し始める。銀座で「新建築工芸学院」を開設し、パウハウスシステムの構成教育に励み、また、店舗設計に精を出し、昭和36年には店舗設計家協会初代会長に就任するなど、店舗設計の世界で活躍する。そして、昭和50年(1975)この世を去る。

国際コンペで4位入選を果たすなど、輝かしい功績を残しながら、現在川喜田の名前を知る人は少ない。村松貞次郎の『日本建築家山脈』でも日本建築界のアウトサイダーと紹介されるほど、その生涯は独特であった。そんな川喜田が、分離派七回展で提出した浅草改造案は、まさに異質の作品であった。

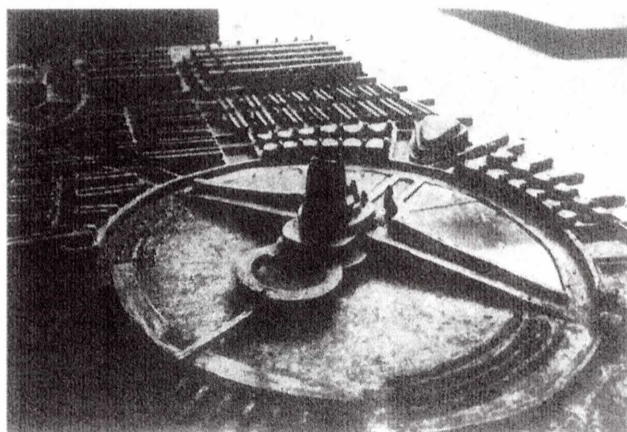


図4-2 浅草改造案—模型写真

2. 浅草改造案

日本建築界のアウトサイダーと紹介された川喜田煉七郎。彼が分離派第七回展に出した浅草改造案は、配置図と模型の二点のみであった。残念ながら、原図が手に入らず、建築新潮に載っていた小さな配置図と模型写真から見ていきたい。

配置図には、浅草改造案の全体構成とどのような施設があるのかが説明されているだけであり、なぜか南を上には描かれている。その点は謎であるが、ひとつずつ見ていこう。

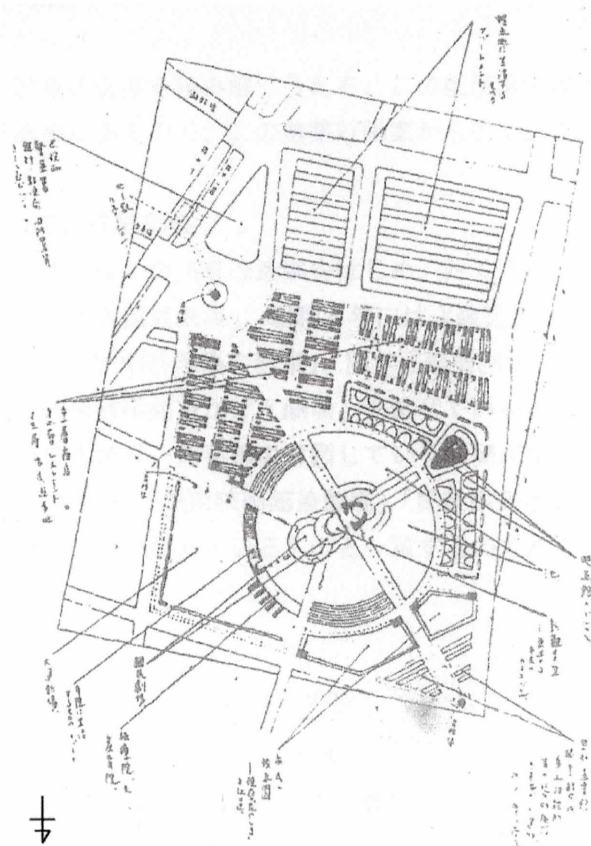


図4-3 浅草改造案—配置図



図4-4 昭和5-7年計画地周辺地図

まず目を引くのが、中心からやや下にある円形の空間である。円の中心に新観音堂を市民のカテドラルとして直立させており、そのすぐ近くに国民劇場を設けている。円の西半分は池となっており、東側の周辺部は、寺院に生活する人々のアパートと施療院及び養育院を設けている。さらに外側に目を向けると、円北東側の空地は大運動場に、花やしきがある北西側には市民娯楽園として、やはり花やしきをそのまま配置している。六区の映画街も機能は変えず、同じく映画街としてきれいに配置し直し、角地には大きな映画館が設けられている。円の南東から南一帯にかけては、3層の高さの建物が占めており、1層に商店、2層にレストラン、3層は市民遊歩道として計画されている。さらに南の街区を見ると、娯楽地に生活する人のためにアパートメントが設けられている。そして、隅田川を背後に銅像のようなもの（文字の判別不可）を中心とした小広場から新観音堂を中心に、全体を貫くように斜めの軸が通されている。この斜めの軸の先に何かあるのかと期待したが、めぼしいものは見当たらず、この軸が何を意味するのかは不明である。もしかしたら、オスマンのパリ改造に倣い、新観音堂をアイストップに、浅草改造の象徴の軸を意図しているのかもしれない。続いて見ていこう。斜めの軸の南東側には、地下鉄の駅があり、三角形の街区には、区役所、警察署、銀行、郵便局、消防署等の公共施設が入るビルディングが建つ。北西側にも、図書館、職業紹介所、身上相談所等の公共の施設が入る建物が建つ。

このように、浅草公園を中心に、劇場や映画館といった娯楽施設を設け、アパートメントや公共施設、商店など様々な機能が配置された壮大な改造計画である。

しかし、よくよく見ると実は、基本的な街区も機能（要素）も既存のものと大きくは変わっていない。映画館があるところは、もともと六区の映画館街であったし、池も同じところにある。また、商店も仲見世通りといった具合である。つまり、既存の空間の上に沿うように新たな空間を構想したことがうかがえる。

さて、このような壮大な計画を構想した、川喜田は何を意図し、何を表現したかったのであろうか。

3. 建築のモダニズム

浅草改造案を読み解くうえで、この配置図と模型だけでは、心もとない。そこで、非常に参考になる建築計画案があるので、この建築計画案から見ていこう。

3つの建築計画案

川喜田はこの浅草改造案をはじめ、たくさんの構想案を雑誌に寄せている。昭和3年には『国際建築』に「民衆映画館兼劇場」。昭和4年には『建築新潮』にて「東京街路改良案」。昭和5年には同じく『建築新潮』で「野外映画映写場の提案」、同年『建築画報』で「民衆娯楽地の三層街計画」を。昭和6年には『建築新潮』で「民衆映画館兼かげえ劇場」を載せている。いずれも、エネルギーに満ちた作品であり、詳細な図面やスケッチもあり、川喜田の意図している空間が読み取れる。

このうち、「民衆映画館兼劇場」「民衆娯楽地の三層街計画」「民衆映画館兼かげえ劇場」の3つの案が、浅草改造案に描かれているものと一致するのである。

民衆映画館兼劇場

昭和3年、『国際建築』に掲載された、「民衆映画館兼劇場」は、このような書き出しから始まる。

「嘗つて分離派第七回展に発表したものに、あとから多少の修正を加へたもの。

製作は一九二八年五月至六月。

「ある民衆娯楽地の改造案」の一部をなす。

自分の研究題目「オーワデトリウム」(主として演奏場、劇場、映画館)に関する三回目の試案。」

まさに「浅草改造案」の一部をなす建築計画であることは明白である。また、オーワデトリウム(auditoriumのことである)を自らの研究題目と言っているように、川喜田の建築計画案には劇場や映画館が多い。ウクライナの国際コンペも劇場であった。これは、やはり、浅草へ通っていた影響と山田耕作ら芸術家との交友に影響があったと推測される。

さて、計画を見ていこう。この「民衆映画館兼劇場」には平面図、断面図、スケッチがそれぞれ2枚ずつ載せられており、自ら研究というだけあって、綿密に計画されている。「映画面と観客席との平面上の考査は主として、小原節三氏の研究に負う。」と述べていることから科学的な根拠をもとに計画されていることがうかがえる。断面図やスケッチを見るとこの建築のおおよその大きさが推測でき、

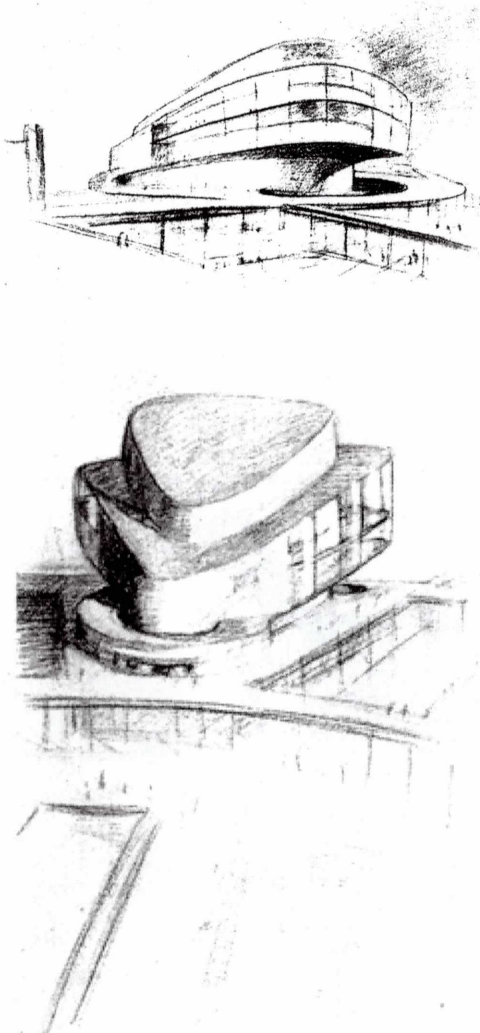


図 4-5 民衆映画館兼劇場—スケッチ

スケールの大きな建築であることが分かる。また、ガラスのカーテンウォールに、装飾のない壁面、そしてコンクリート造の流線型からメンデルスゾーンにみるような表現主義を彷彿させる。

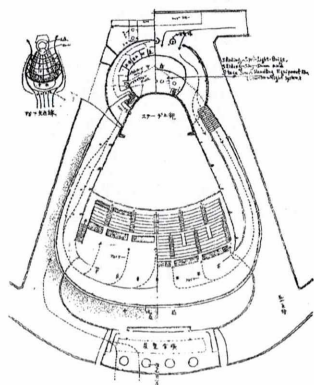


図 4-6 民衆映画館兼劇場—平面図

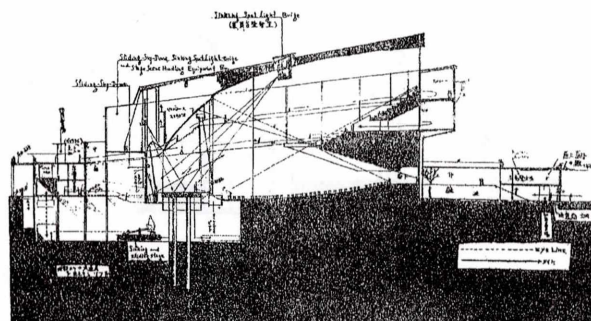
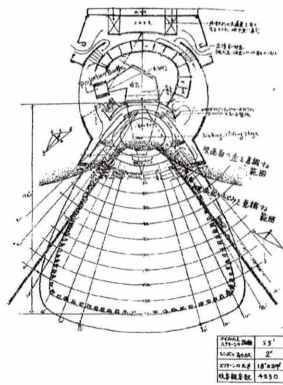


図 4-7 民衆映画館兼劇場—断面図

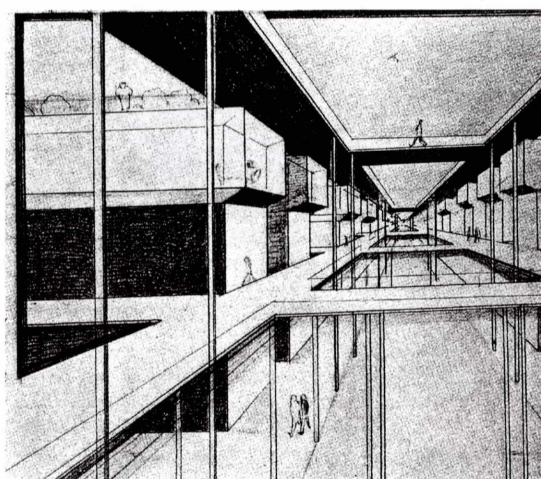
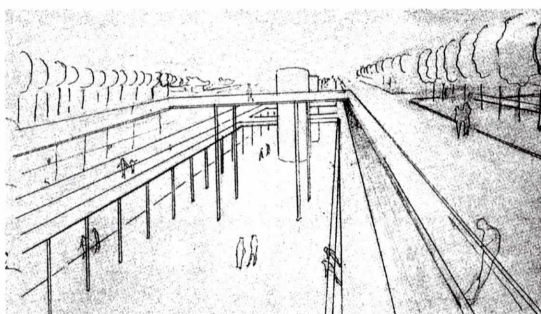


図 4-8 民衆娯楽地の三層街計画—スケッチ

民衆娯楽地の三層街計画

続いて、昭和5年、『建築画報』に載せられた「民衆娯楽地の三層街計画」では、詳しい説明文はないが、平面図、断面図、鳥瞰図、スケッチがあり、AS建築会第2回作品集文集のひとつであったそうである。では計画図を見ていこう。

地下にレストランの厨房物置等を配置し、1層目を二階建ての商店に、2層目には同じく2階建てのレストランを乗せ、そして3層目は市民遊歩道が設けられている。三層街と書いてあるが、1層、2層にそれぞれ2階建ての建物があることから、言葉の響きよりも実際はもっと高く4・5階建ぐらいの中高層の空間となっている。また、鳥瞰図からも分かるように、こうした中高層の空間が均一に大量に並べられており、「浅草改造案」を見ると、こうした空間が、一面に広がっている様子が想像できる。

このような空間をみて、三村幹は「ずっと後になってアメリカの各地の再開発計画で試みられた立体的なショッピングモールを想起させる。」と述べているように、かなり先進的な空間であることがうかがえる。この計画案では、近代的材料をもちいて、無機質に、均質に、そして大量生産された空間が計画されており、機械的な空間を構想していたことが読み取れる。

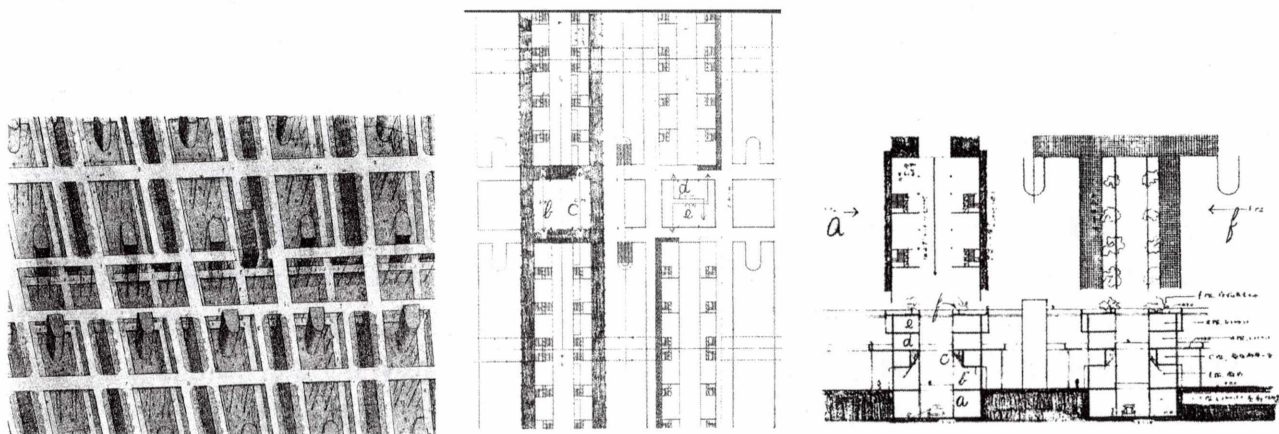


図 4-9, 10, 11 民衆娯楽地の三層街計画—鳥瞰図（左）平面図（中）断面図（右）

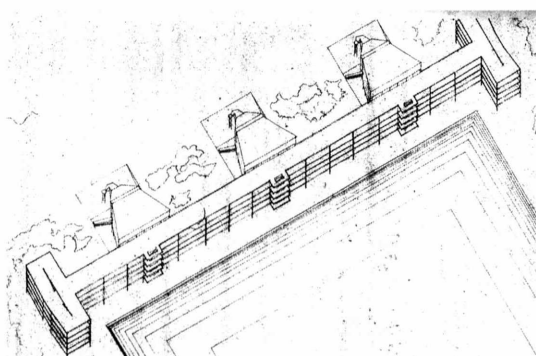


図 4-12 民衆映画館兼かげえ劇場—全体俯瞰図

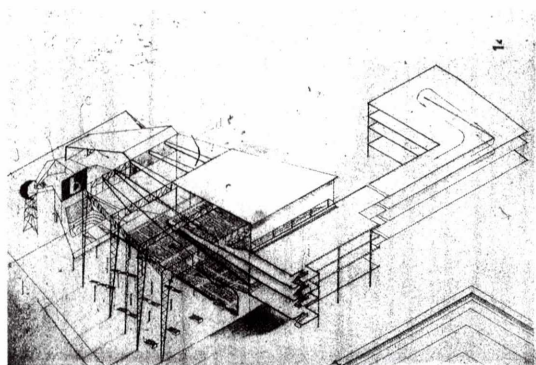


図 4-13 民衆映画館兼かげえ劇場—透視図

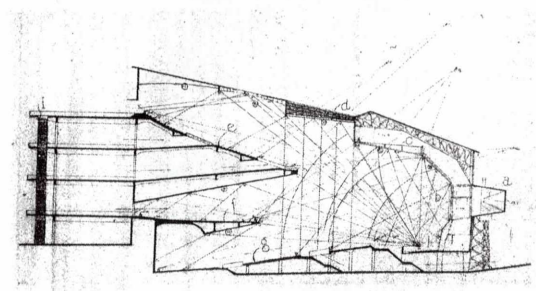


図 4-14 民衆映画館兼かげえ劇場—断面図

民衆映画館兼かげえ劇場

そして、昭和6年、『建築新潮』に載せられた「民衆映画館兼かげえ劇場」は2回にわたって掲載され、第1回は映画館について、第2回はかげえ劇場について詳細に説明されている。

まずは映画館から見ていこう。

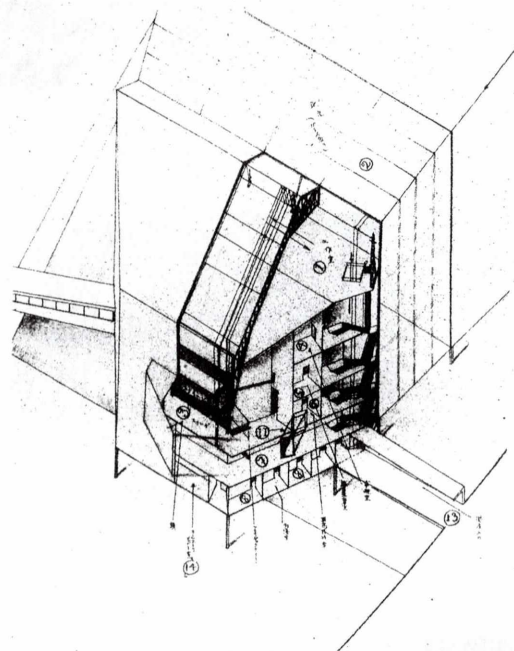
この計画は、以前に同雑誌で発表された「野外映画映写場の提案」へ進展する立場にあるものと述べるも、「…未だ總體の形式において、在來の映畫館から思ひきつて脱しきれぬ傾きがあるが、これは又、これ自身として、他の方面へ發展すべきものを多分にもつてゐると考へるので、敢て一般に發表する。

勿論この種の映畫館は特殊の場合をのぞいて、資本主義社會に實現する事は困難であらうが、明日に向つて『記入し登録して参考に供する現實變更の爲のある書式』として提出する。…」と實現性よりも次へつなげるための計画案であることがうかがえる。

場所は、「東京の工業地域に割合に近いある民衆娯楽地の池畔で、現在の百鬼畫行の状態にある映畫館群を改造せんとする試みである。」と述べ、『浅草改造案』と見比べると、まさにどんぴしゃといった具合である。つまり、浅草六区の映画館街の改造案であることは一目瞭然である。そんな「百鬼畫行の状態にある映畫館群」をどのようにするかというと、収容力のある大きな映画館（計画では収容人数は、総計11500人）をいくつか設け、共通な階層街路でつなぐという計画であり、これは、「恰も地上面一ぱいに無秩序に、

かたまってゐる各個の住宅を相當の共同住宅の中に割あて、共同、共通のあらゆる利益とそれによつて必然生ずる空地の効果とを徹底して利用せしめた事に似てゐる。」と述べるように、戸建て住宅地を高層マンションに建て替えることで、空地を確保するような今日の再開発のような手法・考え方と全く同じであり、当時のアメリカのアパートメントが影響していると思われる。『浅草改造案』では空地利用はされてないが、同じ計画である。

映画館の座席へは、端にあるT字のスロープを使うか外階段を使い、自分の座席がある階層まで行き、そこから中に入る仕組みとなっており、映画館と通路が切り離されている。これは、多量の人々をさばくうえで、合理的に考えた結果、機能分離を行ったのであろう。また、「それは、スポーツを見るスタジアムの様に、明るく、自由に、そして我々の浴場の如く、平易に、あらゆる階級を撤廃して空間に構築されなければならぬ。」と述べるように、空間のヒエラルキーを無くし、平等で均質な空間を計画していたのである。



次にかげゑ劇場を見てみよう。このかげゑ劇場では、からくりや切り絵ではなく、実際の人間がスクリーンの裏で演技をするというものである。そもそも、なぜ影絵なのであろうか。影絵とは現在では、テレビなどの普及により、隅へと追いやられてしまったが、同時は大道芸能のひとつとして民衆娯楽のひとつであった。当然、民衆娯楽のメッカである浅草にもあり、少年時代から浅草に通っていた川喜田にとってもなつかしき思い出のひとつであったであろう。また、三村幹も「…彼らの世代が“旧きもの”のなかに良さを認めつつもその旧さゆえの桎梏を近代の“進歩主義”の方向から何とか改善しようとしたのもまた無理からぬことであつたろう。」と分析するように、浅草六区を近代の解釈で改造するにあたって、近代化で失われつつある伝統性も取り入れたのである。そんな伝統性はこんなところからも読み取れる。

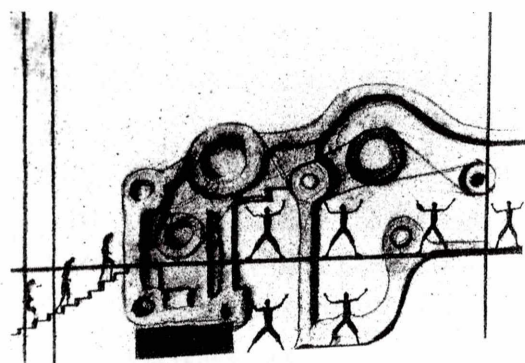


図 4-15 民衆映画館兼かげゑ劇場
—舞台の仕組みと演技の様子

「「かげゑ」では女王も女中も殆んど同じ服装でもすみませす。俳優には特殊な在來の「劇」の様な技巧も化粧もコスチュームも必要としません。我々はいつでも平易な日常の着物だけで—そこに一寸した工夫をしさえすれば—わけなくステイヂの一員になれます。観衆と俳優はここで簡単に一枚のスクリーンを境ひにただで同一人物たる事を得ます。」

後にも触れるが、吉見俊哉は著書で、浅草の浅草たらしめている点の一つに、一人の人物が変幻自在に‘役’を演じている点にあると述べている。このような点を意識しているかどうかは定かではないが、「観衆と俳優はここで簡単に

一枚のスクリーンを境ひにただけで同一人物たる事を得ます。」という記述に、かげえ劇場の中に、浅草の伝統性を見出すことができるのである。

以上、浅草改造案の一部であるが、この3つの計画案から、川喜田が構想した空間が読み取れる。つまり、川喜田は鉄やガラス、コンクリートを用いて、ガラスのカーテンウォールや無機質な壁面、そして均質、大量生産といった、まさにモダニズムの空間を浅草という地に構想していたのである。

ではなぜ、川喜田はモダニズムの空間を計画したのであろうか。

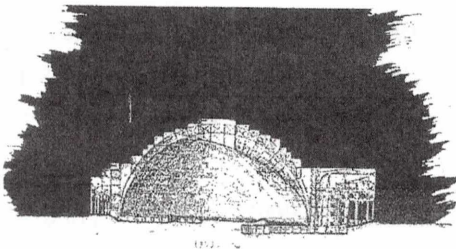
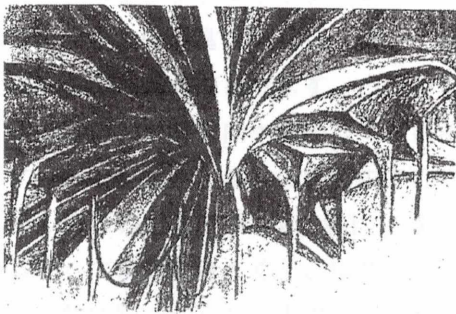


図 4-16 卒業設計の「霊楽堂」

建築科学至上主義

ちょうどこの時代、西欧の建築界では、ある動きが見られた。

産業革命によって、鉄やガラス、コンクリートに新たな可能性を見出した建築家たちは、歴史主義からの脱却を図り、アールヌーヴォーに始まり、ウィーンのセセッション、ドイツの表現派やバウハウス、オランダのアムステルダム派やデ・スティールといった様々な方向へと広がりを見せ、「住宅は住むための機械である」と述べたコルビュジェの工学的な機能合理主義やミースのバルセロナパビリオンに見られる普遍性といった、いわゆるモダニズムやインターナショナルスタイルへと収束していったのである。

そうした動きは、ほとんどのタイムラグをなしに日本にも伝わっていく。かつて表現主義の分離派建築会に属していた山口文象もこの流れをいち早く感じ、自身が中心となって結成した創宇社も機能合理主義を標榜しだす。

そんな中、当時の若い建築家のひとりであった川喜田も当然その影響を受ける。以前は、卒業設計の「霊楽堂」や作曲に見るように、表現主義の傾向が強かったが、浅草改造案ぐらいから、スタイルが変わり、自身も、「建築科学至上主義に急激に轉向」と過去を振り返る。また、数々の言論からも、川喜田の建築科学至上主義は読み取れる。

「…人力の及ばぬより高等なるものから来る直観が用を形に轉ぜしむる—この用と形とが相吞吐する所に立つてこの直観をふるつてこれを解決するものが建築家であるとする。—天上的、飛躍的理論を我々は打破らなくてはならぬ。

建築の形式化とはあらゆる科學的の結論や經驗的に統合された智識といふ建築材料を、一定方向へ向つて選擇し取捨し、綜合し、統一する事それ自身に外ならぬのではないか。そしてこれは結局、吾々の頭腦のうちでの雜多なるものゝ、單なる總和から一つの存在物、眞理、一つの一般的なものをつくり出すその單なる地上的能力の故に外ならないのだ。……建築の仕事は恐らく今日及び明日においては一人の英雄的天才の力をまつて偉大な作品をつくるいふ事から、次第にむしろ平凡化し、一般化してゆくものではないか。繪や彫刻や作曲の技術的修練におけるが如き、師弟關係によつて個人教授的教育、免許皆傳的祕法教育をもつてすべきではなく、公共的なインターナショナル化がなされるのではないか。(この意味で、自分は現在の英雄化されたコルビュジェ—崇拜時代を一つの過渡的なものとして見て居る。)」 『無題』

川喜田は、今日の建築とは、芸術的態度でつくるのではなく、科学や経験から導き出す一つの一般的なものをつくる。言い換えれば「形式化」することが重要であると述べる。

また、『あるディプロマへの感想断片』では、「…今日及び明日の建築家は「藝術家」であるよりも寧ろ、「發明家」でありたい…」と川喜田の建築に対する姿勢が分かる。そしてそのうえで、次のように述べる。

「今迄發展し育つてきた建築の本體、—物的な地上的なそのまゝの人間の建築的技術—それは勿論、エジプト式とか、ギリシヤ式とかのその時代々々に消えていつた流行的な形式（＝様式）ではありません。—それだけを色々な方面から考へ、分析し、綜合して、こんどこそは今迄の形の上の様式（エジプト、ギリシヤ、ローマ、ゴシック、ルネサンス式等…或いは構成派の様式未來派の様式、コルビュジエの様式等々々）ではない、一つの本當の様式—「型」—を明日に向かつてつくつて行かうとする考へ。この考へがつまり、「定型化」の考へなのであります。……つまり、建築を形式化するといふ事は、あらゆる科學で綜合された智識といふ素材を一定方向へ向かつて取捨選擇し、綜合統一する事であるといふ事になるのであります。もう一步すすんでいふと、我々の頭の中での雑多なあらゆる科學的な知識の、單な總和から一つの眞理を發見するといふ事なのであります。—私にいはせるとこの眞理がつまり「型」なのであります。換言すると建築の「型」とは決して現實に今すぐそこに斯うだとガムシヤラにいへる性質のものでなしに、人間全部のだれもの頭の中で一般に形づくられるものなのです。そして、この事は、人間たる以上、地球の上に居るたれもが、當然共通に必用とする一つの眞理であり、人類の生活のための建築の根づかい底にうごめいてゐる規範的合法的體系なのです。そしてことに「國際化」といふ意味が出てくるわけなのです。……我々新建築の解決に努力するものゝ任務は恐らくこの「型」の發見といふ事にあるのではないか。…」

『所謂「型」の問題—（定型化と、國際化と）— 』

「定型化」「形式化」「國際化」と言葉は違えども、その本質は、眞理の追究であり、川喜田の言葉でいえば『型の發見』が今日の建築家の重要な役割であり、建築の目指すべき姿であると述べる。

以上からも分かる通り、川喜田はヨーロッパで流行し出したモダニズムに感化され、建築科学至上主義に転向し、『型』の發見に努めていた、モダニストの一人であった。そして、そのうえで、川喜田は展覧会の意義について次のように述べる。

「…而して、かゝる一般的な「型」を見出さうとする事を、個人的な努力によつてのみうつたへるよりも、先づ如何にこれを具體的に一般に示して、共同的な力によつてその成長、發見に役立てるかを考へる事が、現在でも必要であると考へる。勿論そこには所謂、「個人的な組立様式」から來るある種の主觀的な危險もない事もないが、それと同時にその運動から生ずる數々の利益は、そのすべてを相殺して餘りあるものと考へる。そしてここに、建築の展覧會の明日への新しい意味が生ずるのではあるまいか。……そして建築の展覧會の目的は今や、單なる「啓蒙」の域を脱して、現實の重大な生活の問題を具體的に決定し體系づけるためのキイにさへなろうとしてゐる。」 『建築の展覧會とその作品 — 創宇社の感想 — 』

展覧會とは啓蒙ではなく、提示したものを大勢に人々と吟味し、發展していく場であるにとらえている。つまり、「浅草改造案」とは、科学よって導き出された機能的で合理的な空間を描くことに加え、展覧會にてその『型』を示したのである。

4. 都市のモダニズム

建築科学至上主義に転向し、ガラスやスロープといったモダニズムの空間を構想し、展覧会にてその『型』を示した川喜田。ではなぜ、そのような空間を浅草という地に計画したのであろうか。浅草と言えば、前の中村鎮の計画案でも少し触れたが、独自の空間を形成してきた民衆娯楽地のメッカであった。どちらかと言えば、彼の構想する意図とは対極の関係にあるように感じる。

しかし、そこに、川喜田が構想した本当の意図が隠されていたのである。浅草に込められた意味を読み解く前に、まずは当時の社会背景から見ていこう。

浅草から銀座へ

1 章でも述べたとおり、明治後期から大正初期にかけての浅草とは、西洋文化が入ってきても、それに流されることなく、吸収し消化することで独自の空間を形成し、近代と伝統が混在し、新しい芸術があり、悪所がある民衆娯楽地へと進化を遂げたのである。



図 4-17 昭和初期の銀座

しかし、関東大震災を機に浅草に翳りがみえてきた。もちろん震災後もカジノフォーリーなど時代を彩るものは現れ、盛り場としての性格を失いはしなかったが、凌雲閣の倒壊に始まり、十二階下の私娼街の向島・玉の井への移転、墨堤の近代公園化による衰退など、浅草のシンボルや悪所、名所といった盛り場構造の崩壊が浅草を衰退させた。しかし、浅草衰退の一番の理由は銀座の台頭であった。

明治初年に、銀座煉瓦街として西洋化への先頭を走るも、その後はぱったりと表舞台から姿を消した、そんな銀座が、

関東大震災を境に一躍盛り場として栄えてきた。当時の様子を大正 15 年 6 月の朝日新聞は、「犯罪や人気のうづは今や浅草から銀座へ」という見出しで、「復興途上の銀座はいよいよ鮮明な色調で飾られ始めた。浅草の人気はもう銀座にさらはれてしまっている。」と伝えている。

このように、当時の銀座は、モボ・モガと呼ばれる人々が現れ、カフェーやデパートなどモダンな盛り場として浅草に代わり人気を集めていたのである。

こうした浅草から銀座への盛り場の移行を、吉見俊哉は『都市のドラマトウルギー - 東京・盛り場の社会史-』で次のように分析する。

まず浅草の特徴として、①強烈な消化能力、②先取りの性格、③変幻自在さ、④共同性の交換の 4 つを挙げており、その担い手は地方から東京へきた都市下層民であると述べる。

そのうえで浅草とは、「そこに集う人々に共有される幻想の共同性に基づいて紡ぎ出されていくような盛り場」であり、東京の中にありながら、「何よりもまず、東京での生活から〈脱出〉することのできる避難所（アジール）のような場所としてあったのだ。」と述べ、『幻想としての〈家郷〉』と位置付けている。

それに対し銀座では、急激な発展を促した直接の要因として、カフェーやデパートの大衆化と銀座への進出を挙げ、その担い手として、世代的には若者、階層的にはサラリーマンに代表される新中間層であると述べている。

そのうえで、実際は銀座に訪れる人々全体から見ればごく一部の少数派であったモボ・モガが銀座の寵児として、モダンの象徴として人々の視線を集めていたこと、またそのために銀座がモダンなるものの舞台と

して成立していたことから、銀座を「〈未来〉からの備給によって保証された盛り場」として位置付けている。

このように、各々を位置付けたうえで、浅草から銀座への盛り場の移行について、「都市空間のレベルで、そうした幻想の共同性が広汎な社会層の意識を捉え得なくなり、むしろ先送りされる〈未来〉こそが、意味の備給源として都市生活の諸領域に増殖していったことを示しているように思われる。」と結論づけている。

つまり、浅草から銀座への盛り場の移行が意味するものとは、人々の心境や認識、まなざし、といったより根深い領域にまで、〈未来〉言い換えるなら「モダニズム」が浸透し、増殖していったことを示し、その結果が銀座の隆盛という都市空間のレベルに現れたのである。

それが、関東大震災を契機に大正末から昭和初期にかけて起こった社会的変化である。そして、それはちょうど、建築界の動きと重なり、川喜田が建築科学至上主義に転向し浅草改造案を世に出した時期と重なるのである。

都市への体現

こうした社会背景を踏まえ、もう一度、浅草に計画した意味を見ていくと、川喜田が浅草に計画した理由が見えてくる。

まず1つ目は、「新しい空間の表現」である。いままで見て来たように、モダニズムがより深いところにまで浸透し、未来にまなざしを向けていた時代において、都市空間を銀座の様なモダンな空間にしようと考えるのは当然の成り行きであろう。その際に新しいもの（芸術や政権など）は、古いもの・前のものを壊したり、否定したりすることで、生まれてきた。それは、明治政府が江戸の解体に力を入れてきたように、分離派建築会が過去の様式を否定することで設立したように、フランス革命や中国の文化大革命がそうであるように、歴史が証明してくれる。そうした中で、銀座の前となると浅草が出てくるのは必然である。つまり、新しい空間を表現するうえで、前時代の浅草を改造することが最も理に適っているのである。

そして2つ目は、1つ目と重なる点が多いが「型とロウカリティ」である。川喜田は雑誌にて、このように述べている。

「…この現実を生活を、自然をあらゆる科学の鋭い眼を見開いて隅々まで冷静に油断なく見ていつた終局、必然斯うなるべき普遍的法則を學びとり、構成する事であつて、所謂「定型化」とか、「國際化」とかの問題もこの意味で本質的に解決されてゆくものだと思ふ。

つまり、國際化とか、定型化とかはあらゆる建築を國際的に又共通的に同一の形にしてゆく事ではなしに、建築をこの根本的な問題において發見する、普遍一般に通ずる國際的な人間の生活に共通的な法則それ自身を云ふのであつて、その法則が實現されるときはそこに氣候風土に従ひ、土地や境遇に従つて重要な材料的な吟味が、行われるのである。だからその實現された建築の形がその土地や地方によつて、極端な場合には別ものの様に違つて現はれる事も當然である。だがこの場合、この定型化と、所謂材料の「規格化」とは又、區別して考へねばならぬ事である。」 『建築の方法論的問題 —建築科學の超階級趣味を克服しろ！—』

「私は今、建築の「型」とは、未だ現實としてあらはれないしかも極めて現實的な社會的なものであると云ひました。これが、我々の手で現實にもつてこられたとき、その建物の「型」が、實際に建てられるときはつまり、この自然的な社會的な必然が、始めて個々の人間の自由へ轉化した事になります。

そこで、始めてこの「型」が現實のあらゆる細部の制限を材料としてうけて、ある點迄改變、變更されるわけなのです。つまり、建築が我々の手によつて空間に形成されたとき、「型」が個々の手によつて、自由

に建てられたとき、同時にある點の獨斷的分子、所謂個性的分子が形づくられる事は止むを得ないのです。しかし、その個々人は自由に我儘かつてに建築し得るのではなくて、常に前の「型」によつて、社會的な自然的な「規範」によつて實は嚴として頭をおさへられてゐるので、その「個性的自由」は只外見だけの問題にすぎないのです。……建築のロウカリティは「型」が所謂前にいつた「實現への途にある。」自然的社會的な規範である限り、その「型」自身のうちでは問題にはなりません。それが、實現にうつされたとき始めて極めて重大な制限を建築に興へるのです。實現に迄もつてこられた「型」はそこで、その土地に従ひ、その境遇に従ひ、氣候風土に従つた微細な再吟味が、材料的に行はれる事を忘れてはならないと思ひます。

そのときその建物は、あるときにはその想像した原型とは一見まるで違つた姿をとる場合もありませう。」
『所謂「型」の問題 —（定型化と、國際化と）—』

まとめると、まず「型」を発見することが建築家に求められる作業であり、そのうえで、実際に建築を建てる時になって初めて、その土地の氣候、風土、境遇による制約、または固有分子が吟味されるのである。そのような意味においては、外見上は全く異なるものができることは当然であるが、その本質は普遍であり、そこに「國際化」「形式化」といった言葉が生まれるのであると述べている。

この言論をふまえ、川喜田が浅草について語った記事を見てみると、「とにかく「浅草」つてところは、ゴテゴテとめまぐるしくこんがらかつて、何がなんだか解らないところである事は事實だ。丁度二十六年もここにすまつてゐるが、未だもつて「浅草」が理解出来ない。」と述べるも、一方で、「晝から夜にかけての浅草は混亂そのものだ。しかしその雑踏のうちに怒號のうちにある等一したせきららな人間的な美しさが流れていると自分達は思つた。」と複雑さのなかに、ある種の普遍性を見出しており、言い換えるなら「型」の存在を感じていたのである。また、「そしてつと面白い事は、こうした種類ものゝうち、その新しい魅力によつて最も大衆—その大衆といふ言葉に問題もあらうが—に受けいれられたものだけがその現實の社會と時代の必然の姿のうちに動かすべからざる人氣を獲得した。」と新しい文化が浅草に入ってきて、決して流されることなく、その消化力で浅草化するという、強力な磁場を浅草は持っているのとらえていたことがうかがえる。

以上のことから考えると、固有の空間であり、独特の磁場を形成してきた浅草で計画するという事は、混雑のなかに流れる普遍的な人間共通の「型」が発見できるということ。だけにとどまらず、その先の「ロウカリティ」をも想定し、人々に吟味されることを望んで、浅草という地に計画したということが言える。つまり言い換えるならば、浅草という場であつたからこそ、川喜田の考えるこれからの建築や都市をわかりやすく表現できたのである。

そして、このことは同時にもう一つのことを示唆する。先ほど、浅草だからこそわかりやすく表現できたと述べたが、川喜田の考えの行き着く先は、浅草を超え、都市全般を構想しており、そこには浅草である意味は存在しないのである。

「この必然の形式—「型」—は「様式」の様にある時期に到つて完成される將來のうちの一つの定點では全くありません。それはいはゞ「方向」を意味します。大きくいへば、「型」は今、我々の足元から無限大の向ふ迄通じてゐます。それは我々にとって夢の様なユトピアの固定點でなく、たへず地に足を踏んで努力すべく確立された、方向線であり指示標であります。我々は、この型をあらゆる必然の科學的なもの—自然的にも、勿論社會的にも—で眼をひらいて—鋭く大きく油斷なく感覺器をあけて發見して行かねばならないので

す。そして、我々の形づくった型らしいものを何處迄も繰返して、清算、改良、修正して分析綜合してゆかねばならないのです。……我々の形づくる「型らしい」ものとはデーツゲンの言葉をかりれば、その瞬間々々の我々の「書式」ですが、次ぎ次ぎへ流動しなければ止まないものです。その「書式」は訂正され、加筆され、かきかへられますが、長い大きな眼で見ると少しづつではあるが、そのもとのものは社會と自然の進轉と一緒に確實に前へ前へ發展進化してゐるのだと思ひます。恐らくこの「型」の確定點は無限の延長線上にありませう。」 『所謂「型」の問題 ―（定型化と、國際化と）―』

「…「究極目標は決して最終點の如きものではなく、努力の方向線をあらはすのだ。彼はたゞ目的方針のみ知つてゐるのだ。」(シウタウディングー) 僕はこの言葉を眞面目に謹んで創宇社の諸兄に捧げたいと思ふ。」 『創宇社展感想』

このように、たとえ現実に建築が建ち、都市がつくられようと、そこは決して終点ではなく、無限に続く道の通過点であると述べる。つまり、川喜田にとって、この浅草改造案とは、ユートピアではなく、無限に続く道の一点にしかすぎず、常に進化し發展していくための一つの問い、又は練習であつたのである。

「なぜなれば、「計畫案」は建築を組織する、一つのユーブンゲン（練習課題）にすぎないからである。」 『建築の方法論的問題 ―建築科學の超階級趣味を克服しろ！―』

このように述べていることから間違いない。

このことから、浅草改造案とは浅草という特有の磁場をもっているからこそ、川喜田の考える建築や都市の在り方をわかりやすく表現できたとであり、彼の構想する行きつく先は決して浅草にとられず、どの場所でも可能な普遍性を構想していたのである。そして、そのうえで浅草は練習として計画されたのである。これは、翌年のAS会の展覧会で「銀座改造案」が出されたことから、うかがえる。

そして最後に、やはり浅草に対する想いがあつたことは否定できないであろう。中学から浅草を訪れており、浅草の全盛期も衰退も見て来たのであるから。

川喜田は少年時代を振り返りこう語る。「…小學校の終り頃から中學の五年間を通じて、「物語」をたのしむ事が、そしてそれを書いたり描いたりする事に夢中になつた種はその根を洗ふとみんな「浅草」の中から生れた幻想だつたかも知れない。……「浅草」はまことに日本に於ける新しい藝術の市場だつた。」と芸術至上主義に陥った背景を浅草に見出していた。

しかし、文の最後の方に、「今の浅草をあんなに美化して眺めるのも詩人には面白からうが、現實はもつとつとみじめだ。」と述べ、「…あはしま神社のせまい池にはこの二三年注意して見るとういてゐる亀の死體がめつきりふえた。」と終っている。

全盛期の、幻想的な物語を教えてくれた浅草を知る川喜田にとって、衰退し始めた浅草は見るに堪えないものであつたのだろう。そんな想いが、浅草改造案を構想させ、かつての賑わいを取り戻そうとしたのかも知れない。

5. 結び ～モダニズムの可能性～

時代が、社会がモダニズムへと傾く中で、川喜田もモダニズムに傾くひとりであった。そんな川喜田は、分離派客員という立場から、実質最後となる分離派第七回展に浅草改造案という構想の計画案を発表する。それは、浅草という固有の、そして独特の空間の上に、鉄やガラス、コンクリートといった材料を駆使し、無機質で均質なまさにモダニズムの空間を計画するというものであった。

しかし、それは決して既存空間の破壊ではなかった。浅草という歴史が育んだ磁場のうえにあえて、モダニズムという新しい時代の空間や概念を計画することで、これからの都市の在り方を問いかけたのである。そこには、人間すべてに共通する普遍性、川喜田の言葉を借りれば「型」の追求と、その先にあるロウカリティ、いわば、場所性を考慮することが意図されており、そのような意味から、浅草改造案とは、決してユートピアではなく、ひとつ実験又は練習であった。

つまり、川喜田にとって都市とは、あるアイデアによってつくられるものではなく、そこに住む“人間”のためにつくられるものなのである。そしてそれは、永遠に進化、進歩、改良される、決して終着点のない、動的なものにとらえているのである。

終章

1. 結論

都市の民主化

この転換期の都市東京とはなんであったのか。それは、近代化へのひずみと閉塞感のなかで、都市に対する主権が変わった時期であったと言える。

「文明開化」を代表するスローガンのもと国家主導で描かれた明確なビジョンがあった明治。しかし、盲目的に推し進めた近代化は、様々な形でこの時代にしわ寄せがくる。そうしたなかで、国家主導のビジョンが形を失い、その威厳は揺らぎ始めた。そのため、彼らは、自身の枠組みのなかで、都市を描き始めたのであった。

中村はその都市の未来を内にまなざしを向けることで見出した。東京の内在する「真」を江戸ととらえ、堀割に見出し、それをヴェニスと結びつけることで、伝統と近代化の融合を図った。

田中は東京への限界を感じ、その解決を新都市に見出した。それは、ハワードの田園都市思想に倣い、新都市という近代化を受け入れるための新たな受け皿を用意し、そこに、国際商業都市という近代化による都市東京のさらなる発展を託した。

吉井は、改良のまなざしを足元からの改善に見出した。都市下層民への浴場と娯楽場の提供によって、衛生と教化から東京の底上げを図る。

川喜田は、モダニズムに可能性を見出した。都市はあるアイデアによってつくられるものではなく、そこに住む“人間”のためにつくられるものなのであり、決して終着点のない、動的なものととらえ、常に進化や改良されるべきものとした。

このように、かれらは、時代の閉塞感の中で、都市の未来図を東京の内面や足元に見出す者もいれば、欧州の思想や流行に見出す者もいた。しかし、そうしたなかでも、彼らは、一貫して、近代化を否定するのではなく、また、過去に逃げるでも、未来に投げ出すでもなく、現在の上に、未来図を描いた。それは、都市東京を、過去から未来の連続性の中で、現在をとらえていることを意味する。そしてこれは同時に、都市が国にから、民衆の手に渡ったことを意味する。

また、そうした流れの中で、過去の良いものを積極的に見出し、それを近代の論理のなかで、活かそうという思惑も見える。中村はいうまでもなく、田中は水運というシステムに、吉井は江戸の風呂屋二階という機能に、川喜田は浅草という磁場に、その思惑が見える。それはつまり、都市というものをひとつの価値観でとらえ、つくるのではなく、様々な角度から良いものに価値を見出し、それらを積極的に活用することで、都市の改善、発展を構想していたことがうかがえる。

つまり、近代において都市とは、ひとつの価値観でつくるのではなく、様々な角度から良いものに価値を見出し、それらを積極的に活用することで、都市の改善、発展を目指すことが重要なのである。

構想の計画の可能性

そのような時期において、再び、構想の計画について考え直してみたい。

この時期は現在によく似ていると言われる。戦後復興と経済成長を合言葉に、ひたすら走り続けた、前時代があり、バブル崩壊から始まる不況からなかなか脱することができない。そうした閉塞感のなかで、明確な目標がないまま未来への模索が行われている現在。それは、文明開化に代表される、西洋化と近代化を合言葉に走り続けた明治。そして、そのひずみがいたるところに現れ、閉塞感を感じ始めた、明治後期から昭

和初期と重なる。

このような類似性のなかで、我々がすべきことは、一度足を止めて、後ろを振り返る事である。そうすると、いままで歩んできた一本道が、実はいくつもあるうちの一つであったことが分かり、それは、当時の経済や政治的な理由によって選ばされた道であることが分かる。今一度、客観的な視点から、彼らの様な、民衆の目から、たとえ実現の可能性が限りなくゼロであっても、むしろゼロに近いからこそ描けた未来図を考察することが、現在の閉塞感を打開するヒントになるのではないだろうか。

2. おわりに

『都市』とは何であろうか。この疑問からスタートした、この研究。正直、ますます都市の迷宮に入り込んだような気がする。しかし、結論という形で述べるには、はっきりとした形になっていないが、この場を借りて、研究をしながら感じたことを述べてみたい。

都市東京とは、空間的には断絶しているが、時間軸では連続しているように思う。それは、隣同士でデザインも高さも全く異なり、時には機能も異なる建築や街が平然と並んでいる。しかし一方で、ひとつひとつの場所を時間軸で見えていくと、実は連続性が見えてくる。このことから、空間的には断絶しているが、時間軸では連続しているように思うと述べたのである。

そして、それは同時に双六を連想させる。江戸時代や明治のころの双六には、江戸や東京の名所が描かれていたものがあつた。

つまり、都市東京とは、全体でとらえるのではなく、部分部分でとらえるべきであり、時間軸の流れの中で、その場所性を考慮することが大切なのではないかと考える。そしてそこに、都市東京の魅力があるのではないだろうか。

さて以上より、本論文を締めさせていただく。早いもので建築を学び始めてから7年が経とうとしている。はじめは、何も知らない白紙の状態であつた。それから7年。自分はどのくらい成長したのだろうか。この7年の間に、様々に場所に行き、街を歩き、建築を見た。そして、先生方をはじめ、先輩や同期、後輩、又他大学の人々と出会い建築に触れてきた。つらい時もあつたが、楽しく充実した学生生活を送れたと思う。

本論文を書き上げるあたり、まずは、7年間もの長い期間にわたって、大学、大学院に通わせてもらい、様々な援助をしていただいた両親に感謝したい。また、共に同じ時間を過ごした、先輩、同期、後輩にも感謝申し上げます。皆様のおかげで、楽しく充実した時間が過ごせました。

そして、ご指導いただいた高村雅彦先生には深く感謝申し上げます。先生のおかげで、建築や都市に真剣に向き合えたと思います。最後に、この学生生活で関わったすべての人に感謝の意を示し、本論文を締めくくりたいと思います。

3. 参考文献

1 章 江戸の復権と共存

- ・ 長谷川 堯『都市廻廊 -あるいは建築の中世主義』相模書房 1975. 7
- ・ ゲーテ 著/相良守峯 訳『イタリア紀行(上)』岩波書店 2001. 6
- ・ クリスチャン・ベック 著/仙北谷茅戸 訳『ヴェネツィア史』白水社 2000. 3
- ・ エメエ・アンペール 著/茂森唯士 訳『絵で見る幕末日本』講談社 2004. 9
- ・ 樋田満文『明治東京歳時記』青蛙房 1968. 6
- ・ 永井荷風『日和下駄 一名 東京散策記』講談社 1999. 10
- ・ 陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房 1985. 4
- ・ 中村音羽『中村鎮遺稿』中村鎮遺稿刊行会 1936
- 中村鎮『建築ト装飾「新しい書家の作品を見て」』1912. 5
- 「開拓者」(上・中・下)」1912. 8-12
- 「セセッションの生命」1912. 7
- 「卓上上餘録」1912. 10
- 「卓上上餘録」1912. 11
- 「卓上上餘録」1913. 10
- ・ 『美術新報 5「美術新報 ヴェニス号 第十一巻 第十号」』八木書店 1983. 10
- ・ 東風野人『時事新報「水の都ヴェニス」(上・下)』慶応義塾出版局 1912. 9
- ・ 佐藤功一『時事新報「新日本橋批評」(上・中・下)』慶応義塾出版局 1911. 4
- ・ 中村鎮『建築ト装飾「東京のヴェニス」』南北社 1912. 10-12
- ・ 中村鎮『建築評論 第二年第一号「古い時代と新しい時代」』建築評論社 1919. 5
- 中村達太郎「埋立に賛成」1919. 5
- 塚本靖「住宅地には不可なり」』1919. 5
- ・ 大川三雄、砂田絵理子『中村鎮の評論活動の経緯とその特徴』日本建築学会大会学術講演梗概集 1994. 9
- ・ 藤岡洋保『「建築評論家」中村鎮の建築観』日本建築学会大会学術講演梗概集 1991. 9
- ・ 樋渡彩『舟運都市ヴェネツィアの近代化に関する研究』法政大学大学院修士論文 2008
- ・ 鳥越輝昭『近代化からの「避難所」としてのヴェネツィア - 「前近代」都市が「過去主義者」たちに意味したもの』人文学研究所報 2000. 3
- ・ 馬木知子『明治期における日本橋の修繕・改架にみる「美観」の意味について』日本都市建築学会 都市計画論文集 2003. 10

2 章 新都市のアイデア

- ・ 田中智学 著/別枝長夫 編『東京新都市論』天業民報社 1922. 1
- ・ 里見岸雄 監修/日本国体学会 編『日本の師表 田中智学』錦正社 1968. 10
- ・ 樋口忠彦『郊外の風景 -江戸から東京へ』教育出版 2000. 8
- ・ 東秀紀、風見正三、橘裕子、村上暁信『「明日の田園都市」への誘い -ハワードの構想に発したその歴史と未来』彰国社 2001. 10

- ・エベネザー・ハワード 著／長素連 訳『明日の田園都市』鹿島出版会 1968. 7
- ・藤森照信『明治の東京計画』岩波書店 2004. 11
- ・東京都港湾局 編『東京港史 第1巻通史 各編、総編』東京都港湾局 1994. 3
- ・松岡幹夫『田中智学における超国家主義の思想形成史』相関社会科学 2002. 3

3章 健全な社会へ

- ・中野栄三『入浴・銭湯の歴史』雄山閣 1994. 11
- ・式亭三馬、滝亭鯉文 著『浮世床 -柳髪新話』展望社 1974
- ・菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』青蛙房 1965
- ・花咲一男『江戸入浴百姿』三樹書房 1992. 3
- ・大場修『物語ものの建築史 風呂のはなし』鹿島出版会 1986. 3
- ・全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会「公衆浴場史」編纂委員会 編『公衆浴場史』全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会 1972. 5
- ・加藤秀俊『都市と娯楽』鹿島出版会 1969. 7
- ・中川清『日本の都市下層』勁草書房 1985. 12
- ・大河内一男『日本の中産階級』文芸春秋新社 1960
- ・アラン・コルバン 著／渡辺響子 訳『レジャーの誕生』藤原書店 2000. 7
- ・橋爪紳也『「水都」大阪物語 -再生への文化的考察』藤原書店 2011. 3
- ・東京百年史編集委員会 編『東京百年史 第2巻～第5巻』東京都 1972-1979
- ・石川弘義 監修『余暇・娯楽研究基礎文献集 第六巻「娯楽の研究」』大空社 1989. 9
第十二、十三巻「教育上より見たる娯楽と休養」1989. 9
- ・『下谷区（上・下） 火災保険特殊地図旧35区』都市整図社 1987
- ・内務省地方局・社会局 編『細民調査統計表』慶応書房 1971
- ・近現代資料刊行会『日本近代都市社会調査資料集成 1 東京市社会局調査報告書 31・32・49』SBB 出版会 1995. 1
- ・『日本近代都市社会調査資料集成 2 東京市・府社会調査報告書 14・18・33』近現代資料刊行会 1995. 11
- ・東京市社会局 編『東京市要保護世帯調査 昭和八年十月一日現在』東京市社会局 1934. 11
- ・『建築画報』建築画報社
 - 吉井俊太郎 第十三巻 第十一号「住家の習作」1922. 11
第十二号「七千圓で出来る家」1922. 12
 - 第十四巻 第一号「最近に於ける我が建築界の新傾向についての感想/反譯時代の超越」1923. 1
「住宅の表現」1923. 1
第八号「不自然より自然の開拓へ」1923. 8
第九号「雨と建築」1923. 9
 - 第十五巻 第一号「新東京を飾る建築についての感想 美的感念を失はぬ建築」1924. 1
第四号「二戸建住宅の草案」1924. 4
第七号「杜を負へる家」1924. 7

吉井俊太郎	第十六卷	第一号	「貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場」1925. 1 「一千人キネマハウス」1925. 1
佐藤良清	第十六卷	第一号	「御濠に建つ或る倶楽部」1925. 1
馬場乙夫	第十六卷	第一号	「傾斜地に建つ住居群」1925. 1
八尾良三	第十六卷	第一号	「震災記念館に就て」1925. 1
鈴木忠助	第十六卷	第一号	「編輯だより」1925. 1
	第十六卷	第二号	「編輯だより」1925. 2
吉井俊太郎	第十六卷	第十二号	「都市に建つ小住宅の設計案」1925. 12
	第十八卷	第一号	「趣味の住宅建築の材料」1927. 1
	第二十卷	第二号	「帝都に於ける地震前後の建築に就いて」1929. 2
		第八号	「有賀氏別邸の建築に就いて—建物設計上のアイデア—」1929. 8
	第二十一卷	第十号	「電気店の設計と銀座のマツダランプ」1930. 10

4 章 モダニズムの可能性

- ・三村翰『三村翰評論集 -建築 都市 文化』井上書院 2006. 2
- ・村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会 1965. 10
- ・山本一貴、足立裕司、重村力『Dream of the Other -彼岸の夢 桂、バウハウス、ブルーノ・タウトから新しいエコロジーへ』神戸大学 21 世紀 COE プログラム「安全と共生のための都市空間デザイン戦略」2008. 3
- ・竹内誠『江戸の盛り場・考：浅草・両国の聖と俗』教育出版 2000. 5
- ・加太こうじ『浅草物語』時事通信社 1988. 7
- ・堀切直人『浅草 大正篇』右文書院 2005. 7
- ・岡本哲志『銀座 -土地と建物が語る街の歴史』法政大学出版局 2003. 10
- ・岡本哲志『銀座四百年 -都市空間の歴史』講談社 2006. 12
- ・吉見俊哉『都市のドラマトウロジー -東京・盛り場の社会史』弘文堂 1987. 7
- ・川喜多煉七郎『図解式店舗設計陳列全集』モナス 1940. 1
- ・梅宮弘光『川喜多煉七郎の初期計画案について -川喜多煉七郎論の近代建築運動（その1）』日本建築学会 計画系論文集 1994. 11
- ・三村翰『商店建築「川喜田煉七郎論」』商店建築社 1976. 9-1977. 7
- ・『建築画報』建築画報社

川喜多煉七郎	第十八卷	第十一号～第十九卷	第四卷	「新しき時代の新しき建築講座」（一～三） 1927. 11-1928. 3
	第二十卷	第四号		「創宇社展感想」1929. 4
		第七号		「無題」1929. 7
黒木謹質	第二十卷	第七号		「AS 会第一回建築展覧会瞥見漫評」1929. 7
川喜多煉七郎	第二十一卷	第六号		「所謂「型」の問題 -（定型化と、国際化と）-」1930. 6
		第九号		「民衆娯楽地の三層街計畫」1930. 9
		第十二号		「『浅草』をはなす」1930. 12

・『建築新潮』 洪洋社

- | | | | |
|--------|------|-------|--------------------------------|
| 川喜多煉七郎 | 第九卷 | 第十一号 | 分離派建築會第七回展覽會作品集「浅草改造案」1927. 11 |
| 平野國夫 | 第十卷 | 第六号 | 「建築時評」1929. 6 |
| 川喜多煉七郎 | 第十卷 | 第七号 | 「東京街路改良案」1929. 7 |
| | | 第八号 | 「仁壽生命保險會社の新建築を見て」1929. 8 |
| | | 第十一号 | 「バウハウス概観」1929. 11 |
| | 第十一卷 | 第五号 | 「野外映畫映寫場の提案」1930. 5 |
| | | 第六～七号 | 「民衆映畫館兼かげえ劇場の提案 1、2」1930. 6-7 |

・『建築世界』 建築世界社

- | | | | |
|--------|-------|-----|---|
| 川喜多煉七郎 | 第二十三卷 | 第七号 | 「あるディプロマへの感想断片」1929. 7 |
| | 第二十四卷 | 第二号 | 「建築の展覽會とその作品 -創宇社の感想-」1930. 2 |
| | | 第六号 | 「建築の方法論的問題 -建築科學の超階級趣味を克服しろ!-」
1930. 6 |

・川喜多煉七郎『国際建築 第五卷 第七号「民衆映畫館兼劇場について」』 国際建築協会 1929. 7

その他

- ・橋爪紳也『あったかもしれない日本 -幻の都市建築史』 紀伊国屋書店 2005. 11
- ・石田頼房『未完の東京計画 -実現しなかった計画の計画史』 筑摩書房 1992. 2
- ・石田頼房『日本近現代都市計画の展開 1868-2003』 自治体研究社 2004. 4
- ・日本風俗史学会 編『史料が語る大正の東京 100 話』 つくばね舎 2002. 7
- ・渡辺俊一『「都市計画」の誕生 -国際比較から見た日本近代都市計画』 柏書房 1993. 9
- ・石塚裕道『日本近代都市論 東京 1868-1923』 東京大学出版会 1991. 9
- ・初田亨『図説 東京 都市と建築の一三〇年』 河出書房新社 2007. 6
- ・藤森照信『日本の近代建築 上・下』 岩波書店 1993. 10-1993. 11
- ・鈴木博之 編『近代建築史』 市ヶ谷出版 2008. 10
- ・磯田光一『思想としての東京 -近代文学史論ノート』 国文社 1978. 10

図版出展

1 章 江戸の復権と共存

- 図 1-1 〈中村鎮〉中村音羽『中村鎮遺稿』中村鎮遺稿刊行会 1936
- 図 1-2 〈中村の構想スケッチ（水上公園計画）〉
中村鎮『建築ト裝飾「東京のヴェニス」』南北社 1912. 12
- 図 1-3 〈15 世紀のヴェネチア（F・ガアルディの水彩画）〉
アルヴィーゼ ゾルジ『ヴェネツィア歴史図鑑 都市・共和国・帝国 697—1797 年』東洋書林 2005. 4
- 図 1-4 〈明治 42 年計画地周辺地図〉『明治・大正・昭和 東京 1 万分 1 地形図集成』柏書房 1983. 11
- 図 1-5 〈江戸名所として描かれた日本橋〉斎藤長秋 編『江戸名所図会 上』人物往来社 1967.
- 図 1-6 〈日本橋（太鼓橋）〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8
- 図 1-7 〈日本橋（水平橋）〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8
- 図 1-8 〈第一国立銀行〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8
- 図 1-9 〈江戸橋郵便局〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8
- 図 1-10 〈渋沢栄一自邸が描かれた兜町〉
井上探景『憲法発布式大祭之図 江戸橋ヨリ鑑橋遠景』逓信総合博物館 所蔵
- 図 1-11 〈舂と蔵が並ぶ風景〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8
- 図 1-12 〈日本橋の絵葉書〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8
- 図 1-13 〈妻木自邸のデザイン〉内田青蔵 監修『建築工芸叢誌：復刻版』柏書房 2006. 5
- 図 1-14 〈隆盛を極める明治期の浅草〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8

2 章 新都市のアイデア

- 図 2-1 〈田中智学〉里見岸雄 監修/日本国体学会 編『日本の師表 田中智学』錦正社 1968. 10
- 図 2-2 〈新都市構想—推測配置図〉
東京都港湾局 編『東京港史 第 1 巻通史 各論』東京都港湾局 1994. 3 より作成
- 図 2-3 〈新都市構想—街区構成〉田中智学 著/別枝長夫 編『東京新都市論』天業民報社 1922. 12
- 図 2-4 〈新都市構想—交通計画〉田中智学 著/別枝長夫 編『東京新都市論』天業民報社 1922. 12
- 図 2-5 〈新都市構想—店舗・住宅計画〉著者作成
- 図 2-6 〈新都市構想—中央公園区〉田中智学 著/別枝長夫 編『東京新都市論』天業民報社 1922. 12
- 図 2-7 〈水運豊かな江戸が描かれた絵図〉鋏形蕙斎 『江戸一目図屏風』津山郷土博物館所蔵 1809
- 図 2-8 〈ハウードの都市概念図〉エベネザー・ハウード 著/長素連 訳『明日の田園都市』鹿島出版会 1968. 7
- 図 2-9 〈田園調布の分譲地パンフレット〉東京都公文書館 所蔵
- 図 2-10 〈徳川入城時の海岸線（現代地図をベースに作図）〉
鈴木理生『スーパービジュアル版 江戸・東京の地理と地名』日本実業出版社 2006. 12 より作成
- 図 2-11 〈万国博覧会会場構想〉東京都港湾局 編『東京港史 第 1 巻通史 総論』東京都港湾局 1994. 3

3 章 健全な社会へ

- 図 3-1 〈吉井俊太郎（重見氏筆）〉『建築画報 第十六巻 第一号「紀念會の記」』建築画報社 1922. 2
- 図 3-2 〈有賀氏別邸〉
『建築画報 第二十巻 第八号「有賀氏別邸の建築に就いて—建物設計上のアイデア」』
建築画報社 1929. 8
- 図 3-3 〈勝田屋商店、森永製菓第二販売店〉『建築画報 第二十巻 第四号』建築画報社 1929. 4
- 図 3-4 〈貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場〉
『建築画報 第十六巻 第一号 「貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場」』 建築画報社 1925. 1
- 図 3-5 〈貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場 平面図（左：1, 右：2 階）〉
『建築画報 第十六巻 第一号 「貧民窟に建つ公設浴場兼娯楽場」』 建築画報社 1925. 1
- 図 3-6 〈石榴風呂〉喜多川守貞 著/朝倉治彦, 柏川修一 校訂編集『守貞謄稿 第四巻』東京堂出版 1992. 9
- 図 3-7 〈改良風呂〉平出鏗二郎『東京風俗志』八坂書房 1991. 4
- 図 3-8 〈風呂屋の二階への階段〉菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』青蛙房 1965
- 図 3-9 〈明治 14・15 年頃の湯屋の二階〉『風俗画報 第三百十二号』東陽堂 1905. 3
- 図 3-10 〈風呂屋二階の様子〉菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』青蛙房 1965
- 図 3-11 〈町家スタイル〉大場修『物語ものの建築史 風呂のはなし 鹿島出版会 1986. 3
- 図 3-12 〈社寺建築〉著者撮影
- 図 3-13 〈洋風の銭湯〉町田忍『銭湯遺産』戎光祥出版 2008. 1
- 図 3-14 〈RC の銭湯〉町田忍『銭湯遺産』戎光祥出版 2008. 1
- 図 3-15 〈社交場かつ娯楽場として利用されていた床屋〉
式亭三馬、滝亭鯉丈『浮世床 - 柳髪新話』展望社 1974
- 図 3-16 〈鮫河橋貧家の夕（明治 36 年）〉
『風俗画報 第二百七十七号 臨時増刊「新撰東京名所図絵・四谷区乃部（上）第三十九編」』
東陽堂 1903. 10
- 図 3-17 〈細民地区の分布図〉
『日本近代都市社会調査資料集成 2 東京市・府社会調査報告書 14』近現代資料刊行会 1995. 11
- 図 3-18 〈各調査地対応表（下谷区）〉資料より著者作成

4 章 モダニズムの可能性

- 図 4-1 〈川喜田煉七郎〉川喜多煉七郎『店舗設計陳列全集』モナス 1940. 1
- 図 4-2 〈浅草改造案—模型写真〉
『建築新潮 第九巻 第十一号 分離派建築會第七回展覽會作品集「浅草改造案」』洪洋社 1927. 11
- 図 4-3 〈浅草改造案—配置図〉
『建築新潮 第九巻 第十一号 分離派建築會第七回展覽會作品集「浅草改造案」』洪洋社 1927. 11

- 図 4-4 〈昭和 5-7 年計画地周辺地図〉
地図資料編纂会 編『5 千分の 1 江戸-東京市街地図集成Ⅱ 1887-1959』柏書房 1990. 6
- 図 4-5 〈民衆映画館兼劇場—スケッチ〉
『国際建築 第五巻 第七号「民衆映画館兼劇場について」』国際建築協会 1929. 7
- 図 4-6 〈民衆映画館兼劇場—平面図〉
『国際建築 第五巻 第七号「民衆映画館兼劇場について」』国際建築協会 1929. 7
- 図 4-7 〈民衆映画館兼劇場—断面図〉
『国際建築 第五巻 第七号「民衆映画館兼劇場について」』国際建築協会 1929. 7
- 図 4-8 〈民衆娯楽地の三層街計画—スケッチ〉
『建築画報 第二十一巻 第九号「民衆娯楽地の三層街計画」』建築画報社 1930. 12
- 図 4-9 〈民衆娯楽地の三層街計画—鳥瞰図〉
『建築画報 第二十一巻 第九号「民衆娯楽地の三層街計画」』建築画報社 1930. 12
- 図 4-10 〈民衆娯楽地の三層街計画—平面図〉
『建築画報 第二十一巻 第九号「民衆娯楽地の三層街計画」』建築画報社 1930. 12
- 図 4-11 〈民衆娯楽地の三層街計画—断面図〉
『建築画報 第二十一巻 第九号「民衆娯楽地の三層街計画」』建築画報社 1930. 12
- 図 4-12 〈民衆映画館兼かげえ劇場—全体俯瞰図〉
『建築新潮 第十一巻 第六～七号「民衆映画館兼かげえ劇場の提案 1、2」』洪洋社 1930. 6
- 図 4-13 〈民衆映画館兼かげえ劇場—透視図〉
『建築新潮 第十一巻 第六～七号「民衆映画館兼かげえ劇場の提案 1、2」』洪洋社 1930. 6
- 図 4-14 〈民衆映画館兼かげえ劇場—断面図〉
『建築新潮 第十一巻 第六～七号「民衆映画館兼かげえ劇場の提案 1、2」』洪洋社 1930. 6
- 図 4-15 〈民衆映画館兼かげえ劇場—舞台の仕組みと演技の様子〉
『建築新潮 第十一巻 第六～七号「民衆映画館兼かげえ劇場の提案 1、2」』洪洋社 1930. 6
- 図 4-16 〈卒業設計の「霊楽堂」〉
梅宮弘光『川喜多煉七郎の初期計画案について -川喜多煉七郎論の近代建築運動（その 1）』
日本建築学会計画系論文集 1994. 11
- 図 4-17 〈昭和初期の銀座〉石黒敬章 編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社 2001. 8